

アナトオリ、ナタアシヤを誘拐す

てヴシイリ公爵の末子の例のやくざ者の美男のアナトオリは、友人のドロホフと共謀し、ナタアシヤを誘惑する。ナタアシヤは遂にアンドレイに破約の書を送つて、アナトオリと駈落をしようとしたが、企ては中途で露顯し、ナタアシヤは全くアナトオリに欺かれたるを知り、恥ぢて毒を飲みかけて、終に病氣となつて了ふ。此邊のナタアシヤの心理描寫は、筆々生動を極めて作者の大手腕は唯々驚嘆するばかりである。

ピエルは、謝罪したヘレンと同棲を續けてゐるが、家庭は依然として不愉快である。彼は夙にナタアシヤを愛し、アンドレイの幸福を羨む念さへ有つてゐたのが、ナタアシヤの此事あるに及び、皆同じだ！と心から嘆息する。が、ナタアシヤがすつかり悔悟して打怖れてゐるのを見ると、抑へられぬ愛が胸を焼く、ナタアシヤは人が違つたやうに、今は、物靜かな、考へ深い、しとやかな女になつてゐる。

ナポレオンの再征

ナポレオンの再征

一八一二年の初めナポレオン再び北伐の軍を擧げ、世は再び戦塵の巷となる。露帝の莫斯科行幸、莫斯科人心の動搖、新兵徵發、クツゾフの總督就任、國を擧げて大混雜の中にある。アンドレイはナタアシヤの破約を深く心に含み、アナトオリと決闘するつもりで、彼得堡から土耳其まで其あとを追つて廻つて、終にまた本國に歸り、特に請うて騎兵の聯隊長となつた。ボルコンスキイ家では、老公愈々氣六かしく、マリヤは其の不機嫌の衝に當つて一人苦んでゐる。其中、佛軍次第に國境深く侵入し來り、スモレンスク危しと聞くや、老公は奮起して民兵を組織し自ら訓練の任に當つたりぬ。

ボルコンスキイ老公の死

してゐたが、突然中風で斃れて了ふ。老公はその死の際にマリヤの手をとつて、「おれは始終お前の事を思つてゐる。」と云つた。この老公の一人娘のマリヤに對する苛酷さ意地悪さの底に、どれ程深い愛を潜めて居た事か。老公の性情や心持の描寫は實に面白い。マリヤは、佛軍益々迫ると聞き、父を葬ると直ぐに、秃山カインジョールの田莊を立退かうとしたが、地方の百姓一揆に妨げられ、女一人で困惑してゐる時、折よく來合せたニコライ・ロストフがマリヤを救つて無事に莫斯科に歸らせたが、此時ニコライはマリヤを一瞥見て、愛慕の情を感じる。が、ソオニヤとの約束如何ともすべからず、彼は秘かに悶える。

ポロディノの大戦——クツゾフとナポレオン

佛軍はスモレンスクを陥れ、愈々歴史に名

高きポロディノの大戦の幕が切つて落される。作者は、主としてピエル（彼は、愛國的感情に激せられ、自費を以て民兵の一隊を組織し、ポロディノの戦争の際には、自ら戦線に出かけて、具さに戦況を観た。）の見聞を通じて、ポロディノの大戦を描いてゐる。全篇の戦争描寫中、最も傑れたるは此の一節で、兩軍大會戦の狀は、或は正面から、或は側面から、或は概觀的に略叙し、或は局部的に細寫して、縦横を極め精彩を盡してゐる。而して、作者が最も力を籠めて描いたのは、實に露軍の總大將クツゾフ將軍である。彼はナポレオンをば寧ろ侮蔑を以て描いてゐる。天命を知らぬ一個の驕兒、品位なき成り上り者として描いてゐる。クツゾフをば、眞の露西亞魂の權化として、眞の英雄として、讚美的に描いてゐる。そこには慥かに、露西亞人たる作者の身びいきもあれば、彼独自の戦争哲學を裏書する爲めの幾分誇張的な

クツゾフ將軍

觀方も交つてゐる事は争はれない。が、クツゾフは彼が此一篇に於て創造した諸人物中最も重要なもの一つである。露西亞魂、それは運命に對する絶對の服従といふ事を基礎として、その上に築かれた忍苦の精神である。彼は、肥満した片目の老人で、馬に乗るのも怠儀さう、他の將軍達が速りに軍議を凝らしてゐる時にも、こくり／＼と居睡をしてゐる。

彼は長年の軍事上の經驗と、年齢としの功とによつて、死を眼前に見て戰つてゐる數十萬の人間を一人て指揮する事が出来ない事を了解してゐた。そして戰爭の運命を決するものが總司令官の指令でもなければ、軍隊の屯して居る場所でもなく、又、大砲の数でも、戦死者の数でもなくして、軍紀と名づけられてゐる、不可思議な力である事を知つてゐた。で、彼は此の力に注意を拂ひ、彼の權力の及ぶ限り此の力を指導してゐたのであつた。

又、次のやうにも書かれてゐる。

此の老将はもう事實上情熱を有つてゐなかつた。けれども情熱の結果なる經驗だけを有つてゐた。而して、此人に於ては、多くの事實を結合せしめて、その中より、結論を抽出し出す可き理智は事件に對する哲學的靜觀によりて置き換へられて居た。何事も發意せず、何事も企圖しない。併し又何事にも耳を傾け、何事をも想ひ出す。彼はそれがいざといふ時に役に立つことを知つて居た。彼は用を爲すものは何事でも妨げようとしなかつた。害になるものは、何事でも許さなかつた。彼は部下の士卒の顔に、普通、征服意志と呼ばれる捕捉し難きその力——未來の勝利——をひそかに見る。彼は自分一個の意志よりも更に力強き或るものを認めて居る。事實の避け難き行進が彼の眼前に展開する。彼はそれを見て、それに従ふ。しかも彼の身體を抽象する事を知つてゐるのである。

飽迄も自分の力を恃むナポレオンとは極端な對照である。かくて、クツゾフは、驕こごらず焦あせらず、ボロディノに敗るれば敗れたまゝに、どん／＼と兵を退き、莫斯科をも放棄する。クロボトキンは云ふ。「トリストイの書いたクツゾフは——彼が實際さうであつたやうに——全くの平凡人である。しかし、彼が大人物であつたと云ふ的確な理由がある。それは彼が、避け難い殆ど宿命的な事件の成り行きを豫見して、それを彼自身が導いたのだといつはる代りに、更に大きな災害を避ける可く彼の軍隊の戰鬥力を利用する事に全力を盡すに止めたことである。」

ナポレオンの莫斯科侵入——プラトン・カラタエフ

ナポレオン軍は莫斯科を占領する 例

の莫斯科の大火、佛軍の困惑、その潰走、それ等歴史に名高い事件が非常に精細に、その光景を展開する。クツゾフは佛軍の退きはしめるや、「佛軍の爲めには金の橋でも造つてやれ」と云つて、全力を盡して逸はやる軍勢を抑へ乍ら、佛軍の自然に滅びるに任せてゐる。

莫斯科がナポレオン軍の手中に落つるや、ピエルは慨然として一人踏みとゞまり、匕首を懐にしてナポレオンを刺さんと企てたが、遂に佛軍の手に捕はれて、色々の困難を嘗める。その同じ捕虜の中にプラトン・カラタエフといふ一老兵がある。クツゾフに於て描いた露西亞人の靜穩にして英雄的な宿命觀は、このカラタエフに於て、更に鮮かに人格化されてゐる。彼は單純な、信心深い謙讓な男で、苦痛に於ても、死に於ても、常に善良なる微笑を湛へて、ひたすらに運命に依り従うてゐる。ピエルはカラタエフ

を見て、彼が、「率直と眞實との永久な圓滿な結晶であつて、誰も眞似る事の出来ないほど高尚な者である」のを見た。顔も圓い、身體附も圓い、その聲や體臭までも圓い感じのするカラタエフ——彼の絶對的忍従の精神は、ビエルを動かした。ビエルはカラタエフに、非常に感化されて、身は捕虜となり、死ぬやうな苦みを嘗め乍らも、心は豁然として自由なるを覺ゆるのである。カラタエフは殺された、が、ビエルは味方に救はれる。救つて呉れたのは曾ての敵であつたドロホフである。而して此時ビエルは妻ヘレンの死を聞く。彼女は某々兩貴顯の愛を受けて何方に結婚しようかと躊躇してゐたが、離婚を要求して置いた夫から返事は來ず、其うち色々事煩悶して終に毒を呑んだのである。ビエルは三箇月程熱病を病んでから、一八一三年の一月の末漸く莫斯科に歸る。彼は種々の困難を経て、飽迄も柔和な、敬虔な男となつてゐる。作者は、ビエルに依つて、作者自身の精神生活の發展を語つてゐるのである。

アンドレイの死

アンドレイは、ポロディノの戦で胸部に敵彈を得、野戦病院で治療を受けたが、其時、そのすぐ傍に、兩脚切斷の大手術の痛みに、聲を擧げて泣いてゐる若い士官がある。何人かと思ればアナトオリである。死はアンドレイの怒りを和げた、彼は、決闘しようと思つた其の男に對してももう憎む氣にはなれない。其内恰もロストフ一家が莫斯科立退（それはまだナポレオンの莫斯科を占領せぬ前の事である）に會し、共に連れ立つてゆく。兩方、ロストフ一家とも、アンドレイとも知らず偶然連立つてゐたのであるが、ナタアシャは、その重傷の聯隊長が、アンドレイであつた事を知り、枕

頭に侍して誠を籠めて看病する。アンドレイは皆々として、いつも半無意識の状態にゐるのであるが、或夜、夢とも現ともなく、ナタアシャの事を想ひ描いてゐるところへ、丁度そのナタアシャが寢衣のまま枕元に来る。

「あなたでしたか？」と彼は言つた。「何といふ仕合せでせう！」

ナタアシャは素速く、同時に用心深く跪いたまゝ、彼の方へすり寄つた。そして注意して彼の片手を取ると、その手の上に顔を屈め僅かに唇を附けて手に接吻し始めた。

「宥して下さいまし！」と彼女は頭を下げて彼を眺め乍ら囁き聲で言つた。「私をお宥して下さいまし！」

「私はあなたを愛してゐます。」とアンドレイ公爵は云つた。

「宥して下さいまし……。」

「何を宥すのです？」とアンドレイ公爵は訊いた。

「私の、し……たことを宥して下さい。」とナタアシャは辛と聞える位の斷々な囁き聲で言つた。そして僅かに唇を附け乍ら彼の手をしきりに接吻した。

「私は以前よりも深く、以前よりも滑くあなたを愛してゐるのです。」とアンドレイ公爵は片手で彼女の顔を擡げて、彼の眼が見えるやうにしながら言つた。

アンドレイに迫つた死は、彼の愛を一層純な、一層深いものにした。彼は斯くて、ナタアシャと、子供を連れて看護に來た妹のマリヤとの、優しい介抱を受け乍ら、寂然として死んでゆく。やがて人が莫斯科に歸つた日、ビエルと、マリヤとナタアシャとは三人打寄つて、しめやかな物語に昔の夢を繰返す。

ナタアシヤの胸には再び人生の喜びが湧いて、終に一八一三年の春ピエル、ナタアシヤの二人は結婚し、
ついで、ニコライとマリヤと結婚する。ソオニヤは身を犠牲としてニコライとの約束を自分から破棄し
たのである。

エヒロオク

斯くて此の大小説は漸く局を結んだが、大波瀾の名残は、更に後語の一篇をなして、
そこには七年後の光景が展開される。ニコライは、マリヤの遺産を繼いで禿山ツツシの大地主となり、マ
リヤとの中に既に三人の子を擧げる。ニコライは、時に癩癩を起して農奴を撲つたりなどするが、相も
變らぬ朴訥眞摯な男である。マリヤは貞淑な好夫人、精神生活に於ては、寧ろニコライの指導者となつ
てゐる。(老伯は死に、母は猶生きてゐる。)ピエルは、濟世の大志を抱いて、時勢に激するところあり、
或る一團を結んでその首領となつてゐる。ナタアシヤは今四人の子持、よく肥つた慈愛深き母親で、母
性の典型ともいふ可きその様子には、昔のお轉婆な少女の面影は残つてゐない。アンドレイの遺子とニ
コライ・ボルコンスキイは、父に似た英才敏感の少年であるが、深く叔父ピエルに私淑してピエルの意見
に耳を傾けては、「あの人たちが話してゐること、僕はあれをやらう。……さうだ。僕はやらう。お父さん
もきつと賛成して下さるだらう。」と獨言つてゐる。ピエルの結んだ結社といふのが、即ち前に云つた「十
二月黨」なのだ。作者は、最初の案たる「十二月黨」の結構の基礎を、此のピエルの新生活に於て築いて
ゐるのである。が、「十二月黨」は遂に出ずに了つた。

以上は、此の雄篇のほんの輪郭丈を示したに過ぎない。其人物の如き、其他幾百人の面影がくつきり
と浮彫にされてゐるので、それ等の一々をこゝに紹介する事は到底不可能である。次に、ロマン・ロオラ
ンの評語の一節を掲げて、此の不完全なる梗概を結ぶこととする。「この作の眞の主人公は、それは民衆
である。而して彼等の背後には、恰もホオマアの主人公の背後にあつた如く、彼等を導く神々がある
のである。不可見の『群集を支配する無限に微小なる』力、無限なるもの、息吹いそぎがある。見えざる運命が
盲目の國民を相衝突せしむるこれ等の巨大なる争闘は、神話的の莊嚴さを有つてゐる。」

(二) アンナ・カレニナ

「戦争と平和」と「アンナ・カレニナ」

「アンナ・カレニナ」は、「戦争と平和」と並んで、トルス
トイの最傑作と稱せらる。量に於て、「戦争と平和」の約八分の五、彼の藝術が、圓熟の頂點に達した時
の作で、その若々しさ瑞々さわやかしさに於ては、「戦争と平和」に一籌を輪するが、其の完全さに於ては、「戦争
と平和」以上である。殊に、その中に出て来る人物の一人、レヴィンに於て、最も明かにトルストイ自身
を窺ふ事が出来るので、自叙傳的興味が深い。「幼年少年」及び「青年」と、此の「アンナ・カレニナ」のレ
ヴィンについての描寫を讀めば、傳記は讀まないでも、トルストイがどんな人かは大體わかる。「戦争と平
和」は、歴史的研究に、作者の實地觀察の世態人情を加味したものであるが、「アンナ・カレニナ」は、彼

マシウ・
アノル
の批評

が四十年來、身その一員として其中に呼吸し來つた露西亞の貴族社會の生活と、彼が好んで爲したる田園生活とを描いたもので、マシウ・アノルドが云つたやうに、それは、小説ではなく、實に人生そのものである。すぐ近くにあるものを、望遠鏡で見たやうな——と或る人が評したその描寫の鮮かさには、實に驚嘆の外はない。——まづ、その梗概を語らう。

「復讐は
我にあり
我之に
酬いむ」

「復讐は我にあり、我之れを酬いむ(羅馬書十二章)」これが、此篇の巻頭に掲げられた標語で、實に一篇の趣旨である。人は神の律に逆らふ時、必ずその復讐——罰を受ける、といふ事實を、アンナ・カレニナその人の不幸なる戀によつて語つたのが、此の一篇である。

篇中の人物は随分澤山あるが、主なる者は凡そ、次の七人である。アンナ・カレニナとその夫アレクセイ・カレニン、スチヅ(アンナの兄)とその妻ドルリイ、レヴィンと其妻キッテイ(ドルリイの妹)、それと、アンナの情人ウロンスキイ。

オプロン
スキイ

アンナとウロンスキイ

開卷第一スチヅ即ち、ステパン・アルカディエキッチ・オプロンスキイ公爵

が出て來る。莫斯科の某裁判所長で、愛す可き箇人主義者、始終晴やかな顔に微笑を帯びた男、實に好人だが、聊か呑氣過ぎてだらしが無く、家庭教師の佛蘭西女に手を出して、妻のドルリイとの間に一悶着起す。ドルリイは後にレヴィンの妻となるキッテイの姉で、好家庭から出た好家妻、才では無いが、常識に富んだ、節操正しい女である。さて、夫妻の間を和解する爲に、彼得堡からやつて來たアン

ドルリイ

アンナ

ウロンス
キイ

ナ・カレニナは、莫斯科の停車場で、ふと、ウロンスキイと會つて互にちかづきとなる。ウロンスキイは彼得堡上流社會に持囃さるゝ立派な若者、門地もあり富もあり教育もあり、野心強く、意地強く、才氣情熱併せ得て、しかも風采も頗る美しい。アンナはスチヅの妹、國務大臣として令名高きアレクセイ・アレクサンドロウィッチ・カレニンの妻で、結婚後八年を経て、セリヨジャザといふ男の子があるが、天成の美貌は豊かなる情熱に輝いて未だ若々しい。ウロンスキイはその最初の一瞥からアンナにその心を惹きつけられた。

最初の
一瞥

——で、一寸禮をして再び客車に這入らうとしたが、思はず又その方を見た。女の美しさに引附けられた譯でもなく、又、全體の風采の派手やかな、しとやかさに心を惹かれた譯でもないが、擦違ひざまに、ちらと見たその愛らしい顔の表情が、何となく特別の懐しさを彼に與へたのである。

彼が見返つた時、女も亦顔を此方へ向けた。彼女は長い睫毛の間から輝いて居る茶色の眼で、前から知つても居るやうに親しさうに此方の顔を見て、直に誰かを捜しに群集の中へまぎれ込んだ。ちらりと見た丈ではあるが、ウロンスキイは女の顔とその晴やかな眼の間に照し付けるやうな一種の愛着の色と、それから眞赤な唇に刻まれた微かな笑とを認めるに十分であつた。隠さうとして隠しきれぬ何等かの心持が、彼女の身内に充ち溢れて、それが今の眼の輝き、唇邊の微笑に自ら現れたのだ。そして彼女自らはその眼の輝きを蔽ひ隠さうと努めて居るが、何時となく微かな笑が、抑へきれず現れて來るのであつた。

キッテイとレヴィン

アンナの兄夫婦を愛ふる誠實と、搜をいたはる心盤しとが効を奏して、

「戦争と平和」と「アンナ・カレニナ」

プロンスキイの家の平和は再びとり戻された。が、全篇悲劇の胚子がこゝにある。——ドルリーの實家のシチエルバッキ公爵家は、「戦争と平和」のロストフ家に更に優美を加へたやうな家で、そこに三人の娘がある。長はドルリー、次は今外交家に嫁いでゐるナタリー、末女はキッテイで、今年十八歳、「戦争と平和」のナタシヤのやうな快活な優美な娘であるが、夙にキッテイを戀してゐるレヴィンは——彼はトルストイ其の人の分身といふ可き人物で、莫斯科の門閥で、夙く孤兒となり、大學を卒業して田舎に地主となつてゐる男であるが、戀慕の情止みがたく遂に莫斯科に出て来て、キッテイに求婚する。キッテイはレヴィンを愛せぬではないが、ウロンスキイの華々しきに心を奪はれてゐるのでそれを拒絶する。レヴィンは失望して田舎に歸る。シチエルバッキ家に舞踏會があつて、アンナもそれに出かけたが、その黒天鵝絨の服を着て、雪よりも白い肩を露はし、頸に眞珠をかけ髪に勿忘草を挿し、後れ毛のはらはらと頰に振りかゝるアンナの美しい姿を追ひ廻すウロンスキイの眼附を見て、戀する少女の敏感は、直に、ウロンスキイの心はアンナに奪はれてゐる、彼はもう自分を愛さうとはしてゐないといふ事をキッテイは知る。恥と悲みとを破れた胸に抱き、病氣になつたキッテイは、父母に伴はれて、外國に療養に出かける。アンナは總べてを知つてゐる。ウロンスキイの自分に戀してゐる事も、その爲にキッテイが失望したといふ事も。而してキッテイに濟まぬと思ひ乍ら、恐ろしい事と思ひ乍ら、しかも自分の心がウロンスキイに吸ひよせられてゐる事を感じたアンナは、早くその誘惑から逃れようと、匆々彼

彼得堡に歸る。歸りの汽車に乗り込んだアンナは、ほつとして、「あゝすっかり済んだ。まあ有難い。」と思つた。窓外には風雪が荒れてゐた。汽車が或る停車場に停まつた時、彼女はプラットホームに降り、雪を舍んだ冷たい空気を、熱した胸に吸ひ込んだ。而して再び客車に入らうとした時、入口の洋燈の光のチラチラする中に軍服姿の男の立つてゐるのを見た。それはウロンスキイであつた。アンナは暫く相手の顔を見た儘口を利く事が出来無かつた。二人は光の射さぬ蔭にゐたのだが、アンナは彼の眼に一種異様な表情の閃いてゐるのを見た。ウロンスキイは、思ひつめた調子で、「私は何處にでもあなたのお出でのごとくに居たいと思ふ……私には他に仕ようがありません」と云つて、而して仄暗い中に凝つとアンナの顔を見つめてゐた。アンナは何とも答へなかつた。しかし、其の表情は、今耳に聞いた言葉は、自分の理性が恐れてゐるところのもので、而も感情はそれを聞き度いと憧れて居たものだと言明してゐた。

彼得堡の停車場に著くと、夫カレニンが待つてゐた。

「あゝ、まあ夫の耳は何故あんなだらう。」彼女は夫の打解けぬ、いやに固くなつた様子を見ると然う思つた。別けても圓い帽子の垂れの下から出てゐる夫の耳朶を見て今更のやうに驚いた。彼女を見ると夫はいつも皮肉な笑を湛へて大きな疲れたやうな眼で眞直に彼女を見た。夫の片意地らしい疲れ衰へた顔を見ると不快な思ひが彼女の心を賑した。彼女は、夫がもつと違つた人間になつて居て呉れる事を望んでゐたのだ。それが斯うやつて夫に會つて見ると、彼女は何よりも先づ自分の胸に、夫に對する不満の念を禁じ得なかつた。その不満の念は夫と自分との關係に就いて感ずる眞實の眞實と共に、彼女には是迄にも十分覺えのある心持であつた。これ迄は別に氣が付かずに居たのだが、今と

なつては、彼女はそれを明かに、而も傷ましく自覚しない譯には行かなかつた。

カレニンは、ロマン・ロオランの言葉を藉りて云へば、「高い役人の完全なる典型で、反語の下に自己の眞の感情を匿すに馴れた」男であり、「威厳と臆病との、パリサイ主義と基督教的感情との混合。彼の聰慧と實際の寛大にも係らず、彼にとつてはそれから脱する事のどうしても不可能なる技巧に満ちた世界の奇妙なる産物」であり、「自分の本心に對して躊躇することに立派な理由を有つてゐる人物」である。斯くの如き人物がアンナにとつてあき足らぬのは當然である。固より愛の結婚ではなく、アセクセイが或る地方の知事であつた頃、アンナの叔母が無理に賣りつけたので、八年間の結婚生活、何一つ面白い事もなく、唯一の楽しみとして、セリヨジヤを愛して來たのである。今や、其の心の均衡は、ウロンスキイによつて破られて了つた。

アンナの不義　かくて遂にアンナはウロンスキイと不義の關係を結ぶに至つたのである。アンナは決して淫奔な女ではない、人一倍良心の強い、また理性も慥かな女であるが、より強い情熱は、ウロンスキイの激しい戀に煽られて、遂に其身を燬く可く炎々として燃え上つたのである。はじめてアンナがウロンスキイに許した時の描寫――。

まる一年の間と云ふものウロンスキイの以前の慾望に代つて、彼が生命を擧げての慾望となつて居たところのものであり、同時にアンナに取つては到底不可能な、恐ろしい而も尙ほ幸福の慶夢となつて居るところのものであつた其の

慾望は、今や遂げられたのである。彼は蒼くなつて唇を腫はしながら彼女の前に立つた。そして彼女に氣を鎮めて居るやうにと云つた。併し、自分には何うしたら然らう出来るか、何故然らうするのか解らなかつた。

「アンナさん、アンナさん」彼は息をはずませて言つた。「アンナさん、何うぞ後生ですから……。」

併し彼が聲高く言へば言ふほど、彼女は曾ては倨傲であり快活であつた頭を、今は恥かしきの思に充たしつゝ、低く低く垂れてゐる。そして腰を屈めて、坐つて居たソファから床の上へ、自分の足元へ突伏さうとした。若しウロンスキイが支へなかつたら、彼女は絨氈の上に倒れたに相違無い。

「神様、お救し下さいまし。」彼女は胸に手を當て、叫んだ。

彼女は自ら頭を低くして救しを乞ふ他無いと感じた。自分を罪深いもの、道ならぬものに思つたのであつた。而も自分の生命に觸れるものとは彼と言ふものゝ外に何も失くなつた今となつては、彼女の祈禱を捧ぐ可き當體は矢張彼の外には何も無かつた。彼を見ると何とは知れず身に痺と屈從の念を感じるだけで、最早何一言言ふ事が出来なかつた。彼の方では又、殺人者が自分の殺した死骸を見て感ずるやうな感じに打たれるのを感じた。その所謂命を奪つた骸こそ、彼にとつては戀といふものであり、二人の戀の第一段でもあつた。この恐ろしい産物と云ふ價を拂つて二人の購ひ得たるものを願はば、そこに何とは知れぬ、恐ろしい卑む可きものがあつた。この精神上の裸體を恥づる心の爲めに、女は憐み男は苦んだ。けれども殺者がその犠牲者の死骸の前で恐怖を感じながらも、その犯罪を巧みにし、死骸を爲めには、死骸をずた／＼に裂いて埋めて了はなければならなかつた。即ち自己の爲した殺人によつて得るものを利用するの外は無かつた。

斯くて激しい執着とも見る可き激怒の情に驅られて、殺人者が死骸の上に我が身を投げ掛けて、それを引きずり、

引き裂きつする、丁度そのやうに彼は、彼女の顔と肩とに接吻を浴びせかけた。彼女は彼の手を取つて動かなかつた。「然うだ、汚辱で買はれた此の接吻！然うだ、如何なる場合にも自分のものたる可き此の手——是れこそ自分の共犯者の手だ！」彼女はその手を押上げて接吻した。彼は跪いて彼女の顔を見ようとしたが、彼女は顔を隠して何も言はなかつた。と、遂に我と吾が身を制しようとするかのやうに、彼女は立ち上つて一生懸命に男を押し除けようとした。彼女の顔は稍々可憐な趣を加へたばかりで、矢張りいつものやうに美しかった。

「最う、是れでおしまひねえ。」と彼女が言つた。「私には、最う、貴方の外に何もありません。然う思つて頂戴ね。」

「思はない譯には行きますものか。私の全生命ですもの。この幸福の瞬間は……。」

「幸福ですつて！」と彼女は恐怖と嫌惡の念に驅られて叫んだ。その恐怖は知らず識らず男の方にも感染して居た。「何うぞ。最う何も言はないで下さい。」

彼女は急に立上つた。そして男から身を遠ざけた。

クラスノシエロの競馬

其内クラスノシエロに軍人達の大競馬があり、ウロンスキイも選手の一入であつたが、誤まつて落馬する。見物席からその様子を見て、我を忘れて悲嘆するアンナの様子をぢつと見てゐたカレニンは、世評偽りならず、アンナがウロンスキイに戀してゐる事を今や明かに知る。而して、歸りの馬車の中で、今日の舉動を責めると、アンナは、「私は彼の人を戀してゐるのです。私はあの人の妻です。私は貴方といふものに我慢が出来ません。貴方を憎んでゐます。何うぞ貴方の好いやうにして下さい。」斯う言ひ放つて、身體を投げ出して顔を掩うて泣いた。カレニンは身動きもせず涙と

アンナの告白

前方を見てゐたが、その顔は、俄かに冷たい莊嚴な死の色を帯びて來た。家に着いた時、彼はその同じ表情で云つた。「私はこれから私の方法を取る迄は體面を維持して行くと云ふ事を言つて置く。——私は、私の名譽を傷けない爲に、それが必要なのだ。」

夫から現状のまゝにして置くといふ手紙を受取つた時——アンナは其頃田舎の別荘にゐた——アンナは、カレニンの徒らに面目や體面を重んじ、自分をも他をも瞞着して行かうとする心持をそれに讀んだ。「若し彼の夫が彼の人を殺してもするなら、私はどんな事でも堪へる事が出来たらう……私は彼の夫が私を捕へようとする虚偽と欺瞞との蜘蛛の巣を破らねばならぬ。何でも好い、どんなことでも虚偽と欺瞞とよりは勝つてゐる。」と彼女は思つた。しかし、彼女の良心は一方犇々と彼女を責めて止まぬ。「けれども何ういふ風にして！ あゝ、神様、神様！私のやうな憐れな者が御座いますか！ いえ、私はそれを破つて了ひませう、私はそれを破つて了ひませう。」

アンナの悔悟

其中にアンナは産褥に就いた。カレニンはアンナからの電報に呼び寄せられて、その病床を訪れる。アンナは、謝罪の爲めにカレニンを呼んだのである。彼得堡の自邸へ馬車をつけたカレニンは——其日、アンナは彼得堡にカレニンは莫斯科にゐた——、玄關口で、「首尾よく御出産で御座いました。」といふ事を玄關口で聞いた時、顔色を蒼くした。彼は自分がどんなに妻の死を望んでゐたかと云ふ事を、今になつてはつきり知つたのである。アンナの部屋にはウロンスキイもゐた。彼は低い橋

アンナの苦悶

子に斜めに腰を掛けて、手で顔を隠して泣いてゐた。而して、「私は全く貴下の支配の下にゐます。が、どうぞ此處に居る事をお許し下さい。」とカレニンに言った。アンナは高熱に喘ぎつゝ夢中で叫んでゐる。「彼夫は未だ来ない。誰も彼夫を知つてゐません。私にでさへ中々分りませんでしたもの、私の知つて居る筈の彼夫の眼——セリヨヂヤの眼も全くそれと同じよ——私はその爲に彼の兒の眼を見る事に堪へられないの。あゝ、まあ苦しいこと！ 水をおくれ、早く！」夫の來たのを見るとアンナは泣いて許しを請うた。

「どうぞ一つ覚えてゐて下さい、私は宥免といふ事の他何も要りません。他のものは何も要りませんといふ事を……何故彼の人には來ないのでせう？」と彼女は戸口の方へ、ウロンスキイのゐる方へ向いて云つた。「お出でなさい！ 貴夫の手を彼の人に與へて下さい。」ウロンスキイは寢床の側へ來た。そしてアンナを見てまた手で顔をかくした。

「顔をお見せなさい——此の夫を御覽なさい！ 此の夫は聖者です。」と彼女は言つた。「おゝ、顔をお見せなさい、お見せなさい！」と彼女は怒つたやうに言つた。「貴夫、その人の顔を出させて下さい！ 私は見たいのですから。」アレクセイ・アレクサンドロウィッチはウロンスキイの手を取つてそれを顔から離させた、其の顔は苦悶と慚愧の表情に恐ろしく見えた。

「貴夫の手を上げて下さい。その人を許して上げて下さい。」

アレクセイ・アレクサンドロウィッチは眼から流れ出る涙を抑へようとせず、彼に手を與へた。

「あゝ有難い。有難い！」と彼女は言つた。

「それでもう何もかも好いのです。もう少し私の足をのばして下さい。それでようござんす。此の花は何で嫌なのでせう——少とも蓋のやうぢやない。」と彼女は室の中の懸物を指して言つた。「あゝ神様、神様、何時きまりが附くのでございませう？ モルヒネ下さい。先生、モルヒネを下さい！ おゝ神様、神様！」
斯う云つて彼女は寢床の上をころ／＼とのたうちまはつた。

アレクセイ・アレクサンドロウィッチ・カレニンはロマン・ロオランがいしくも云つたやうに「パリサイ主義と基督教的感情との混合された一性情の人である。形式張つた、世俗的の名聞にのみかゝづらつて、虚偽の生活に馴れた、冷淡な俗物としての彼の一面には、また豊かなる基督教的感情が漲つてゐる。最初はアンナの不貞を許し難いものと思ひ、何よりも世の中の聞えを憚つて、いつそ死んで呉れ、ばい」と思つてゐたが、その病床に臨み、其の苦悶を見、其の心からの悔悟の言葉を聞くと、憤りも怨みもすつかり消えて了つた。彼は、「床の側に跪いて、アンナの腕——袖越しに熱氣が燃えるやうな——に額を押當て、子供の様に嗚咽し」いさぎよく其妻を宥し、ウロンスキイを宥した。而して、「今迄苦痛の源となつたもの、今は却て幸福の源となつて」心は克己の快さと宥恕の喜びとに満たされた。

彼(ウロンスキイ)は起ち上らうとした。が、アレクセイ・アレクサンドロウィッチは彼の手を捉へて言つた——「どうぞ私の言ふ事を悉皆聞いて下さい。それが肝腎です。貴下に誤解の無いやうに私の心持、私を今迄導いて來た、又これからも導いて行く心持をお話ししなければならんです。御承知の通り私は妻を離婚する事に決心しました、そして其の手續さへ始めました。私はこれを始めるのに心が決まらなかつた、非常に苦んだといふ事を慚まずに言ひ

ます。私は貴下と彼女に復讐をしようといふ慾望に驅られてゐた事を告白します。私は電報を受取つて、同じ心持で此處に來たのです。いや、彼女の死ぬることを望んでゐたのです。併し……」彼は自分の情を彼に打開けようかと考へて言葉を止めた。「併し、私は彼女を見て彼女を赦しました。そして赦すといふ事の幸福が私に自分の義務を明らかにさせて呉れたのです。私は全く赦します。私は一方の頬が打たれた故に、他の一方の頬を向けます、裏衣を取られば外衣もやりませう。私は只神に私から赦すといふ事の幸福を取上げないで下さいと祈るのです！」

涙が彼の眼に浮んで來た。その輝いた清く澄んだ眼眸は、ウロンスキイの心に深くも刻みつけられた。

「これが私の立場です、貴方は私を泥土の中に踏み付けてもよろしい、私を世の笑ひ草としてもよろしい、私は彼女を見棄てますまい、私は貴方を責めるやうな言葉は一言も言ひますまい。」アレクセイ・アレクサンドロウィッチはなほ言葉を續けた。「私の義務ははつきり私に分つてゐます。私は彼女と一緒にゐなければならぬのです、又居ようと思ふのです、彼女が貴方に會ひたければお知らせさせませう、併し今は貴方は彼方へ行つておいての方が好いと思ふのです。」彼は立ち上つた、啜泣きに彼の言葉は杜絶された。ウロンスキイも立ち上つた。そして前屈みな眞直でない姿勢で眉の下から彼を見た。彼にはアレクセイ・アレクサンドロウィッチの心が分らなかつた。が、それは何となく高い、自分の世の中を觀る眼を以てしては到底窺ひ知る事の出來ぬやうなものであることを感じた。

自尊心の強いウロンスキイにとつては、カレニンの寛大が寧ろ堪へられないのである。彼は、非常に面目を失つたやうに、屈辱を被つたやうに、而して、其の屈辱を洗ひ去つて了ふあらゆる力を奪ひ去られて了つたやうに感じた。苦惱は彼を壓した。其夜彼は自殺を謀つた。併し、拳銃の弾丸は心臓を外れ、その生命は取留められた。

アンナの
家出

リデア伯
爵夫人
セリヨチ
ヤ

アンナ、ウロンスキイに投ず

アンナも亦死ななかつた。アンナが回復すると共に、ウロンスキイの傷も癒えた。それと共に、二人を許して心の平和を得たカレニンも、自分の心を導いて行く神聖なる力の外に、自分は頓着なく、外部から自分の生涯を支配する他の殘酷強大なる勢力、即ち世間の存する事を感じて來る。カレニンには此の名譽とか體面とかいふ事が非常に力強く働くのである。アンナも再びカレニンを厭ひ出す。ウロンスキイは固よりアンナを忘るゝ事は出來無かつた。アンナは終に夫を捨て子を捨て家を捨て體面を捨て、ウロンスキイの許に走つた。斯くて、離婚の手續も履まず、ウロンスキイと共にその私生の子を連れて伊太利に去る。

かくて、長い間の外國旅行から、彼等二人は彼得堡に歸つて來たが、今は全く日蔭者の有様である。カレニンの家には、リデア伯爵夫人が入り込んで、セリヨチヤの世話を焼いたり、家事を締つたりしてゐる。アンナは夫を捨てたが、捨てられないのは子である。残して置いたセリヨチヤ懐かしさに堪へ兼ねて、一目會はせて呉れと言ひ遣つたが、リデア伯爵夫人が、カレニンに勤めて拒絶させる。アンナが彼得堡に來たのも全くセリヨチヤ懐かしさである、アンナは或日——それはセリヨチヤの誕生日であつた——そつと我家に忍び入つてセリヨチヤに逢つたが、カレニンの足音に驚かされて、與へようとして持つて來た玩具もその儘手に下げたまゝ逃げ歸る。

捨てゝも捨てられないのは、子供と而して世間である。彼得堡の上流社會は、皆アンナの爲に門戸を閉

「戦争と平和」と「アンナ・カレニナ」

ち、彼等自身は、アンナ以上の汚行を常としてゐながら、アンナを疎外し唾棄する。これが、矜持の高
いアンナには實に堪へられぬ苦痛である。アンナが一夜、自棄氣味になつて劇場に行くと、人々が皆座
を立つてその傍から去るといふ有様である。劇場から歸つたアンナは、皆これも貴方のおかげだと云つ
て怒りの涙を溢す。

アンナの嫉妬——死

アンナとウロンスキイとは彼得堡から去つて、ウロンスキイの領地にゆき、
そこで田園生活を送つてゐる中に、アンナはドルリーの訪れを得て、ドルリーからキツティがレヴィンと
結婚して、幸福な家庭の人となつてゐる事を聞いて喜んだが、自分を顧ると唯わびしく唯はかないのであ
る。ドルリーはウロンスキイと結婚せよとアンナに勧める。併し、カレニンが離婚を許すわけが無い。た
とひ離婚を許したにせよ、「……けれど私の男の兒は？ 彼の兒は私に呉れないでせう。彼の兒は私の棄
てた父親と一緒に大きくなつて私をさげすみ、嫌ふでせう。よう御座いますか、私は同じやうに……愛し
てゐると自分では思ひます、自分の身より以上に——二人の者を、セリヨヂヤとウロンスキイを。」

一方、ウロンスキイは既に戀の惑溺から覺めた。社會的興味が、彼をアンナから引き離した。アンナ
の執拗な愛の要求を、病的とも云ひ度い嫉妬を、うるさく厭はしいものに思ひ初めたウロンスキイは、昔
とは打つて變つて冷淡になつた。「彼の人には何時でも自分の思ふ儘に行へる権利がある、そればかりで
なく私を棄てる権利もある、そして私は何も持つてゐない。」かう思ふとアンナは言はうやうやなく心細い。

ウロンスキイは所用あつて、一週間程アンナをひとり残した。歸つて来る約束の六日目、馭者が主人を
乗せずに戻つて來た時には、彼女は、彼が彼女の見えぬ處で何をして居るかとの疑ひを抑へる事が出來
なかつた。彼女の嫉妬は益々激しくなつて、ウロンスキイを苦めもし厭はせもした。その中にカレニン
に離婚の談判をしてゐるオブロンスキイが、その交渉の望み少ない事を知らして來た。その事から、又、
取返し難い深い争ひが二人の間に起つた。それは、二人の關係を公正な——神の前にも人の前にも恥
ぢる事の無い正しいものにしなない限りは止む事の無いやうな、深い底から來た争ひであつた。ウロンス
キイは和解しないで、ソローキン公爵夫人の許へと出て行つた。アンナの嫉妬は、公爵夫人が、ウロ
ンスキイにめあはせようとする夫人の娘の上に燃えた。アンナは、堪へ難くなつて、ウロンスキイに早く
戻つて呉れるやうにと手紙を書いた。ウロンスキイは併し歸らなかつた。アンナは居ても立つても居ら
れなくなつて家を出た。死がアンナを誘うた、アンナは鐵路に身を横へた。
アンナが死んでから、ウロンスキイは六週間の^{おひだ}間といふもの、飲まず食はず、一言も口をきかなかつ
た。三箇月目に起つたセルビヤの戦争に、彼は義勇兵を志願して出征した。「さう、武器としてなら私は
未だ用ゐるに足るものがあるかも知れません。しかし、人間としての私は難破した船も同様です。」かう、
ウロンスキイは述べた。

レヴィンとキツティとの結婚生活

アンナとウロンスキイとの不幸なる戀と並行する一つの傍

流として、キッテイとレヴィンとの結婚生活が描かれてゐる。都會嫌ひで、田舎に住み農業に従事してゐたレヴィンはキッテイに拒絶せられてから、ばあやを對手に淋しい日を送つてゐたが、其内スチヴァが遊びに来て、キッテイの近状を語り、又、近所の田莊に逗留に来てゐたドルリイもレヴィンが訪うた際に、再び求婚せよと云はぬばかりに勧める。レヴィンは、拒絶された當時の事を思つて悶々としてゐたが、或日偶然キッテイが病癒えて母と姉ドルリイの田莊に行く所を瞥見するに及び、心に潛んだ愛が、再びよみがへつた。そして、外國に行つて歸つてから、莫斯科のスチヴァの家でキッテイに逢つて、求婚して首尾よく結婚し、キッテイを連れて田舎に歸つた。この二人の結婚生活の描寫は、全く作者の自傳である。そして作者は、此幸福な二人の田園生活と、アンナとウロンスキイとの戀の生活とによつて、神の意に従ふものゝ幸福と、それに反けるものゝ不幸浮華な不健全な都會の生活と質朴な田園生活を對照させてゐる。——前にも云つた通り、レヴィンは、實にトルストイ其人である。此篇の終りの方で、作者はレヴィンの心に起つた變化を記してゐるが、それは實に作者の内生活を其の儘に記したものと云つてよい。レヴィンはやがて家庭生活の幸福の蠱惑から覺めて、人生の疑問に心を悩ますに至り、種々の哲學書を讀んだりなどするが、一向に解決を得ないで、苦悶して自殺を思ふ事も屢々である。しかし、或る時百姓との野での立談に、ふと耳にとめた言葉から、至純なる神の信仰を心の底から呼び起す。

「——ミチウなんて奴は、手前の意にばかり溺れて居て、自分の腹を肥やす事の餘餘にも考へやしません。佛し、フォ

カニッチは立派な人間でさ。あの男は豈に生きてるとてもいふ人間で、神様の事を忘れたことはありません。」

「神様の事を何う思つてるんだね。何ういふ風に豈に生きて居るのかね。」とレヴィンは殆ど叫ばんばかりに云つた。

「きまつてまさあね、神様を信心して、御旨に協ふ道を歩いてるんでさ。元來ミチウなんぞとは人間が違つてまさあ、何うです、呼んでお遣んなすつちや、且那は悪い人間を好きさちや無いでせう。」

「然うとも、然うとも、鬼に角、またあとで。」

レヴィンはすつかり昂奮してしまつて、斯う言ふや否や杖を持つて住居の方へ行つた。フォカニッチが對に活き、眞理に活き、神の道に活きてゐると言つた百姓の言葉の爲めに、今まで閉込められて居た漠然として居るが意味ありげな思ひが、急に迸り出ようとするやうに思はれた。そして全力を舉げて或る一つの目標へと進みながらそのさきさきの考へが渦巻をなして、彼の腦中を擾亂し、輝かしい光を以て彼の眼を眩ませたのであつた。

レヴィンとトルストイ

さて以上はほんの輪廓だけを示したものに過ぎぬ甚だ不完全なものである。殊に、レヴィンに就いては、もつと語らねばならないのだが、こゝにその餘地が無いのを憾みとする。内気で正直で少々つむじ曲りで、しかも主我的で、自分の事より外何も考へられぬといふやうなレヴィンは、トルストイの全作中、最もトルストイの面影をよく示すものとして、レヴィンの行爲や思想は、トルストイその人の行爲や思想として、トルストイを論ずる際にはよく引き合ひに出される。此の小説の主なる興味は、アンナの悲劇及び一八六〇年頃の露西亞の社會相の種々なる描寫——客間、士官の俱樂部、舞踏會、劇場、競馬などの——と共に、其の自叙傳的性質に在るのである。トルストイの

「戰爭と平和」と「アンナ・カレニナ」

トルストイ自身の
家庭の記

「アンナ・カレニナ」の
エピソード

作中の如何なる他の人物よりも、コンスタンティン・レヴィンは遙かに作者自身の體現である。トルストイは常に此の人物に自分自身の理想——同時に等しく保守的であり民主的である——や、『知識階級』を輕蔑する地方貴族の反自由主義（政治上の自由を獲得せんとする西歐の自由主義進歩主義の反對）を賦與したのみならず、又、自分自身の生活をも賦與した。レヴィンとキッテイの戀及び彼等の結婚初期の生活は、正にトルストイ自身の家庭の記憶を移しかへたものである。——恰も同じくレヴィンの兄弟の死が、トルストイの兄ドミトリイの死の陰慘たる追憶である如く。此作の最後の部分、この小説には不必要な後部は、凡て、我々をして其の當時彼を壓しつけて居た懊惱を洞察せしむるものである。『戦争と平和』の後部が他の計畫された『十二月黨』への、藝術的變轉であつたならば、「アンナ・カレニナ」の後部は、それより二年後に、『我が懺悔』によつて現はる可き道德的革命への自叙傳的變轉である。」と、ロマン・ロランは云つてゐる。實際トルストイは、此篇の結末に於けるレヴィンの描寫に於て、その後半生の精神的苦闘を豫示してゐるのである。此等の點から見ても、此の作は、トルストイを知らんとするものゝ是非讀まねばならぬものである。

「アンナ・カレニナ」の藝術的價值と其缺點と

さて、此の篇を一つの藝術品として見る時、それは實に驚く可きものである。彼得堡と莫斯科との貴族の生活、交際社會の裏面、地方貴族の状態、農民の生活、軍人の生活、外國湯治場の空氣、競馬の光景、銃獵の光景など、無數の場面が、精妙極まり

アンナを
苦め過ぎ
たこと

クロボト
キンの批

なき筆を以て描出されてゐる。其の人物も澤山ある、人物の多過ぎるのが缺點だとさへ思はれる位である。缺點といへば、此の作に於て誰でも見出すであらうところの缺點は、トルストイが餘りに道義といふ事、神の掟といふ事を強調し過ぎた結果、主人公アンナを苦め過ぎてゐるといふ事である。此の作は、「復讐は我にあり、我これを報いん」といふ文句を標語としてゐる。而して、アンナをして、恐ろしい神の復讐を受けしめてゐる。しかし、アンナの場合は、果してしかく苛酷に罰せらる可きものであつたらうか。アンナは若い娘の時に、老いてしかも情味のない男カレニンと結婚したので、其時、彼女はその結婚に對して十分な自覺を有つてゐなかつたのである。で、彼女は戀といふものをも知らなかつた。その淋しい月日の中に、ふとウロンスキイが出て来る、彼女ははじめて戀を知り眞の愛を知つたので、アンナの戀もウロンスキイの戀も極めて眞面目なものであつた以上、離婚して新に結婚し直して新生活に入るの寧ろ必然の成り行きでなければならぬ。作者が神に代つて、アンナに與へた罰は、當然なものとして讀者を首肯せしめる事は出来ない。アンナの末路があんな風になつたのは神の意ではない。それは、世間の力である。クロボトキンは云ふ。「例によつて、トルストイの忠實な藝術的才能は、自ら他の原因を——實際の原因を示してゐた。それはウロンスキイ及びアンナの自家撞着である。彼女の夫に別れ、世間の『輿論』を——即ちトルストイ自身が示してゐるやうに、その事件に對して何等かの容喙を許されるほどに誠實でない女達の意見を——蔑んだ後にも、彼女もウロンスキイもその社會と全然別

れて了ふ勇氣を持たなかつた。その無用なことはトルストイもよく知つて居て、實に精妙に描いて居る。それにも拘らず、アンナがウロンスキイと一緒に彼得堡へ歸る時、彼女自身及びウロンスキイの最も重大な懸念は——彼が現はれた時にベッシーや其他の婦人達がどんなにして彼女を迎へるかと云ふ事であつた。そしてアンナを自殺に導いたものはベッシー等の意見であつて、確かに超人間の主義（即ち、トルストイのいふが如き神の意志）では無かつた。」

こゝでも、トルストイの藝術は、その理論の以上へ彼方へと行つてゐるのである。

第十講

晩年の作品

——トルストイの藝術(3)——

- 一、「死」の問題を取扱へる二作品……………(四二五)
- 二、「クロイツェルツナク」と「復活」……………(四三三)
- 三、發表せられたる遺稿……………(四三七)

(一) 「死」の問題を取扱へる二作品

轉機以後

轉機以後の作品

「アンナ・カレニナ」の結果に於て豫示されたトルストイの變化は、「アンナ・カレニナ」の筆を擱いてから間もなく、實際に、彼の前にやつて來た。所謂「轉機」が彼に來たのである。彼は、「我が懺悔」を書き、「我が宗教」を書き、「我等何を爲す可き乎」を書いた。其間、所謂民話、一般人の讀物たる可き教訓的宗教的の通俗物語には筆を染めたが、藝術的の創作には遠ざかつてゐたのである。が、一八八六年「イワン・イリイチの死」と脚本「闇の力」を書き、一八九〇年には「クロイツェル・ソナタ」を書き、一八九五年には「主人と下男」を書き、一八九六年には「ハヂ・ムラト」の稿を起し（これは遺稿として出版された）一八九九年には、最後の大作「復活」を書いた。斯くて、彼は再び藝術家としての面目を恢復したのである。而して、これ等の諸篇、何れも皆傑作で、これ等のみを以てするも亦、一代の文豪として百世に誇るに足るものである。次に、これ等諸篇の梗概を、出来る丈簡単に説いて置かうと思ふ。

「イワン・イリイチの死」と「主人と下男」とは、いづれも死の問題を取扱つたものとして、其の類を同じうする。

「イワン・イリイチの死」

イワン・イリイチは、裁判官である。平凡な、何も考へない、唯、

死の問題
を取扱へ
る小説
イワン・
イリイチ

晩年の作品

身の榮達と、世間體とに腐心して、人生の意義などといふものは曾て顧みたる事のない男である。宗教もない、理想もない、殆ど思想といふものすら無い、天下滔々たる醉生夢死の輩の、その最も代表的なる一人である。結婚後十七年、もう十六の娘と高等學校へ通ふ息子とがある。今では、検事として故參株であるが、一家の經濟も樂には行かないし、昇進口は朋輩に横取りされるして、むしやくしゃとしてゐる處に、はしなくも、司法省に於て今までよりもすつといふ地位に任命される事となつて大喜び。彼は先づ任地に出かけて、家を見つけたが、その家は、こんな家に棲み度いと今迄夢想してゐたやうない、家であつたので、彼は、上機嫌で家具を買ひ込んだり、裝飾をしたりした。ところが、カーテンを吊らうとして、誤まつて梯子から落ち、横腹を撲ちつけたのが、其時は何とも思はなかつたが、後の病氣の原因となる。左の脇腹に一種の痛みが生じ、始終不愉快な氣持に襲はれ続けなので、醫者にかゝり、藥を呑みはじめたが、病氣の不安を押し包んで、彼は依然として役所へ出て、其日々を送つて居る。

……此の意識を包んで、其上之れに肉體上の痛苦を包んで、更に其上に恐怖をも包んで、彼は寢床へ這入らなければならず、然し大半は大抵眠れないのであつた。それでゐて朝になればまた起きなければならず、齋物を着て裁判所へ出て、饅舌つて、重々物をしなければならず、若し又出かけないとすれば夜晝二十四時間は家にゐなければならず、どつちにしたつて皆苦しいのだ。斯うして彼は唯一人斷崖の上に立つて誰れ一人彼を解するものもなく、氣をつけて呉れるものもなく、暮らして行かねばならなかつた。

病氣は次第に進んで來た。彼は次第に瘦せ衰へて來た。而してその不愉快な氣分の中に彼は、妻子も醫

者も、皆自分に本當の事を知らせずに、氣休めの偽りを以て對して居る事を思つて、痛切に孤獨を感じた。併し、彼自身すら、氣休めの偽りを以て自分に臨んでゐるのではないか。「イワン・イリイチは自分が將さに死なんとしつゝあるのを見た。そして絶間無く絶望して行つた。心の奥では自分が死にかけてゐるのがわかつてゐた。けれども此の觀念に段々慣れて來るところか、彼は容易に之を掴まなかつた。——否、全く之を掴めなかつた。」

彼は、もう病床に就き切りである。彼一人死の前に慄へてゐるのに、彼がその爲に生きて働いて來たと云つてもよい妻や子は、相變らず、肥つて樂しさうで、些しも彼の苦みに同感しようとはしない。而して、彼に本當の事を云はない、彼等自身でも、彼の命がもう長くはないといふ事が、判り過ぎるほど、判つてゐながら、彼に對しては、すぐによくゐる、と氣休めをいふ。而して、病人を厭うて、しんみになつて介抱をして呉れる事さへしない。斯くて彼はひとり苦しく、ひとり淋しい。

「……何よりイワン・イリイチを、じめにしたものは、彼が彼等に思ひやつて貰ひ度かつた程に、誰も彼を思ひやつて呉れない事であつた。時々苦痛が長びいたりした後は、恥ぢてその度に打消して了ふのであるが、誰か知らん彼を不憫に思つて、病兒へでも對ふやうに對つて呉れる人を欲しかつた。彼は子供が甘えさせて貰つたり、慰めさせて貰つたりするやうに、甘へさせて貰つたり、キッスして貰つたり、オイ／＼泣かせて貰つたりしたかつた。彼は自分が裁判所の重要な一員である事、母も灰色になりかゝつてゐる事、そこで、そんな事は到底不可能だといふ事は解つてゐた。しかも解つてゐてなほそれが欲しかつたのだ。ところが、ジラシンの關係は略之れに近いものであつた。そして之

周囲及び
彼の中に
ある虚偽

ジラシン

れあが故にジラシンと一緒にゐる事が彼に對しては慰めてあつた、イワン・イリイチは泣き度いと思ふ。甘やかして貰つて、オイ／＼泣き度いと思ふ。と、そこへ同僚のシエベクがやつて来る。すると泣いたり甘へたりする代りに、彼は生真面目な厳格な本氣さうな面をかぶる。そして唯だ情力一つもつて控訴院の確定判決の効力に就いて自分の見解を提出して、それをどこまでも頑固に主張する。この彼の周囲や彼の内にある虚偽は何よりもイワン・イリイチの最後の時期を痛めたものであつた。

ジラシンといふのは、イワン・イリイチの看病の爲めに頼んだ若い農夫であるが、此の男ばかりは、彼にうそをつかない。飽迄も誠心誠意で、心からの深切で、面倒を見て呉れる。イワンの生涯は、自他の欺瞞を以て終始したと云つてよい。その生涯の終りに於て、イワン・イリイチは、このジラシンによつて始めて人間の眞實といふものを見たのである。「私共は皆死ぬんで御座います。だから、これしきの事は何でもありません。」と眞直に云つて骨を惜まずに介抱して呉れるジラシンによつて彼は、はじめて、人間の正しい生活といふ事の暗示を得た。而して、彼は自分の生涯を顧みて、自分が當然爲す可き事を爲して生活しなかつたのではないか、といふ考へに捕へられた。

「だが若しさうだとすると。」と彼は獨り言を言つた。「それからこんな自覺、即ち貰つたものを残らず無くして了つたといふ自覺でもつて此の世を去るのだとすると、そして又そのあやまりを正す路が無いのだとすると之れは如何なる？」彼は仰向に寝て、彼の全生涯を全然新しく點檢し始めた。彼はその朝も例の奉公人を見た。それから妻、それから娘、それから醫者と見て行つた。さうしたら其のする動作、その口に出す言葉が一つ一つ前夜彼に見えたあの恐しい

堪らなく
怖ろしい
廣大な欺
騙

イワン・
イリイチ
チの開悟

眞實を確證せぬものは無かつた。彼はその中に自分を見、彼が之まで生きて來た總てを見之は總て正しいものぢやないといふ事をあり／＼と見た。それは堪らなく怖ろしい廣大な欺瞞であつて、生も死もひつくるめて隠蔽してしまつたのだ。此の自覺が彼の肉體の苦悶を一層烈しくし、十倍にもしてしまつた。彼は呻つた。左右に轉げ廻つた。掛け蒲團からグイ／＼押し出した。蒲團は重く抑へつけて、呼吸もつけないやうな氣がした。そこで無性に之が憎くなつた。さうだ、自分のこれまで爲て來た事は正しい事で無かつた、そんなら正しい事とは何だ——かう彼は自分自身に問うて見た。その時彼は、誰か自分の手にキスしてる様な氣がした。眼を開いて、それが息子であるのを彼は見た。彼は息子を不憫に思つた。妻が傍にやつて來た、妻は泣いてゐる。彼は妻を不憫に思つた。「さうだ、おれはこいつ等を見じめにしてゐる。」と彼は思つた。「こいつ等が可哀さうだ。でも、おれが死んだら、皆の爲めにもいゝだらう。」かう彼は思つた。彼は妻をちらりと見て、息子を指して云つた。「あつちへやれ……可哀さうだ……そしてお前も亦……」彼は妻に何とかして「ゆるしてくれ」と云はうとした。ところが、「すてゝくれ……」と云つた。併し衰弱してゐるので云ひなほす力も無くて手を振つた。「主」は其の眞意のある所を理解してくれるだらうと思つたからだ。

と、忽然として彼をこれ迄苛責した一切のもの、彼の所を立去らうとしなかつた一切のものが、一へんに兩方へ、八方へ、そしてありとあらゆる方向へ消散しつゝある事がハツキリ見えて來た。彼は皆のものを可哀さうに思つた。そこで彼等が苦まない様に實行しないといけないのである。彼等を解放し、又我が身も其苦悶から脱かして了ふのである。「なんて正しく、なんて難作が無いんだらう！」と彼は思つた。「だがあの苦痛は？」と自分に聞いた。「あいつは何處

へ行つた。え、お前は何處にゐる、苦痛は？」

彼はそれを探し始めた。

「あゝ、ゐる、ゐる。だが何でもないんだ。これは此のまゝ地つて置け。」

「で、今度は死だ。こいつは何處にゐる？」

彼は死といふ昔馴染の恐怖を探した。そして見つからなかつた。「あいつは何所にゐる？死は如何した！」恐怖は影も形もなかつた。何故なら死といふものが矢張無かつたからであつた。

死のゐる座には光がゐた。

「死のゐる座には光がゐた。」

「ではこいつがさうなんだ。」と彼は思はず大きな聲を出して叫んだ。

「嬉しい！」

彼にこれは皆ほんの瞬間の内に起つた。そして其の後には斯うした意味の瞬間に何の變化も被らなかつた。唯、現在だけは苦悶は此の上二時間続いた。咽喉には喉鳴り、瘦せ衰へた身體には痙攣が現はれた。それから喉鳴りと大息が段々永く間を置いて來た。「もう駄目だ。」と誰かが云つた。

彼はこの言葉を聞きつけて、魂の中で其の言葉を繰返した。

「死は終つた」と獨り彼は云つた。「もうそんなものは何もない。」

彼は息を吸ひ入れて、その中途で息が止めて、身體をぐつと伸し、そして死んだ。

トルストイの體得した死の悟り

「死の居る座には光がゐた」——これは、トルストイの體得した死の悟りである。彼はその全生涯を、死の問題に苦んだ。その苦みを通じて達し得た悟りが、此の一篇には、鮮かに具象化されて居る。此の

より教訓的
ワシリイ
アンドレイ
イチ

意味に於て、此の一篇は、彼の全作中にもかなり重きをなすものである。彼の死生觀を窺はんとするもの——彼の死生觀を窺ふ事は、やがて、彼の思想の基調を尋ねる事である——は、是非共、この一篇を讀まねばならない。

「主人と下男」

「主人と下男」も亦、同様の境を描いたもので「イワン・イリイチの死」のより藝術的なるに對し、これはより教訓的であると云へよう。強慾の商人ワシリイ・アンドレイ・イチは、安い山林の賣物が出たので、他の商人に先を越されまい爲めに、下男のニキタに櫓を驅らしめ、風雪を冒して賣主の許に急行する。途中に道をと違へて、夜もすがら、雪の曠野に彷徨する。饑寒に迫られて、一歩も動けない主人と下男とは、櫓を止めて、外套に包まつて、そこで夜を明かす可く決心する。ワシリイは、今自分が生死の界に居るにも拘らず、買はうとしてゐる山林からの利得を胸算用したり、買主との交渉の方法を腹案したり、又、自分の是迄の努力の跡を考へて、心からの満足を感じたりする。

「……本當におれ達も父親の代から掛けて、随分經歷つたもんだなあ。村の裕福な百姓と云はれてた時分はまだ極く並みのものだつた。小さい風車場に、宿屋一軒で、それが財産全體よ、ところが俺だ、俺は此の十五年間に何を仕上げたんだ。乾物屋一軒に、居酒屋二軒、風車場が一箇所に、小作をやらしてゐる持畠が二箇所だ。それに店を張出して、屋根を鐵で葺いた家宅が一軒。」と、得意げに一々算へ立て、「父親の代とはこれぢやえれい違ひだ。近在の口の端にのる名も大したもんだ。プレシヌノフつて其の名がよ。」

下男ニキ
タ

併し、饑寒は益々加はり、明くるを待つ夜はなかく明け無かつた。彼は急に死の恐怖に捕へられた。「斯んな處にべん／＼と死ぬのを待つちや居られ無い。馬に乗つて、逃げ出すんだ。」かう考へた彼は、傍に半ば凍え乍ら眠つてゐる下男のニキタを残し、馬に乗つて、ひとり逃げ出した。あとで、ニキタは、主人の自分を捨て、逃げたのを知つた。彼は、一生貧しさに苦められて来たみじめな農夫であつた。

「彼の生涯は一度だつて、御祭のやうな事が無かつた。却て間斷のない辛苦で、そして今は、そろ／＼それに倦んで来た、そこで自分は愈々死ぬんだと思つたとて、彼には別に恐ろしくは無い。彼にはワシリイ・アンドレイッチといふ様な主人があつて、此の世に居ては之に使はれて居た。併し未だ此の外に今一つ自分を此の世に送つて呉れた本家本元の主人が一人あつて、自分はこれに依り縋つてゐる様な氣がした。で、死ねば死んだで、此の主人の力にそのまゝ従つて了ふだらうし、それに此の主人は彼を親切にして呉れるだらうと思つて居る。そこで自分は愈々死ぬんだと思つたとて、彼には別に恐ろしくは無い。」

かう、ニキタは考へてゐる。而して、逃げて行つたワシリイの事を考へて、「此の衆は世の中をあきらめきれ無えだから、わし等とはまるきり違ふだ。氣の毒なこんだ。」と思つた、而して、ニキタは安らかな心持で死を待ち受けてゐた。一方ワシリイの方は生き度い一心で、風雪の中をあてどもなく走り廻つた揚句、矢張、もとの橋の傍に戻つて来る。橋の中にはニキタが雪に埋もれて死にかけてゐる。ワシリイの心の中には未だ會て知らぬ或る衝動が起つた。彼は自分の身をその上に投げかけて、凍え行くニキタの身體を暖めてやつた。彼は死の際に押し遣られて、そこにはじめて人間の愛といふものを感得した

未だ會て
知らぬ衝

のであつた。ワシリイの體の温かみでニキタは次第に力づいて来た。

「ニキタ
が生きて
居ればお
れも生き
てゐる」

で、彼はニキタが自分の下になつて寝て居り、それがほかく温まつて居り、生きて居るといふ事を感じた。そして、何だか彼は——其のニキタであり、ニキタは——此自分であり、自分の中に命は無くても、そのニキタの中には残るといふ氣がした、彼は耳を澄ましてニキタの呼吸使ひを聞き、その微かな鼾聲まで耳に入れた。「ニキタは生きてゐる。ニキタが生きてれば、おれも生きてゐる事になる。」と凱歌を奏する様に云つた。そして何だかまるきり新しい何だか一生を通じても味はつた事のないものが浸み込んで来た。

斯うして、ワシリイはニキタにその命を與へて死んだ。——この一篇も亦、トルストイの悟得した境地を、最も力強く物語るものである。

(二) 「クロイツェル・ソナタ」と「復活」

「クロイツェル・ソナタ」

「クロイツェル・ソナタ」は、彼の男女觀を語つたもので、非常に力強い作品

である。久しく、通俗的な教訓小説にのみ筆を染めてゐた彼は、この一篇を出すに及び、藝術家としての復活を謳はれた。しかし、その中に書かれたる彼の主張に對しては、寧ろ世の多くからは非難された。

——それは實に力強い物語である、寧ろ恐ろしき物語である。「それは兇猛な勞作である。此の作は傷いた獸がその受けた苦みの爲めに、自ら復讐を逞しうするやうに、社會に向つて放たれた作である。」と、ロマン・ロオランは言つてゐる。また、「その効果に於て、その情熱的集中力に於て、その印象の動物的

男女觀を
語る作品

ロマン・
ロオラン
の批評

な卓絶さに於て、乃至形式の充實と爛熟とに於て、トルストイの如何なる他の作も、『クロイツェルソナタ』に匹敵しない。」と、ロマン・ロオランは言つてゐる。

激しい嫉妬の發作に驅られて、その妻を殺した一紳士——その名をボズドマイシェフといふ——が、夜汽車の中で、其の兇行の顛末を告白する。彼は、いかにしてその妻を殺すに到つたか？——この、殺人の顛末が、此の一篇の内容である。彼は若い時代を型の如く放蕩の中に過し、型の如く結婚し、型の如く子を擧げた。彼は結婚生活の始から終まで、間斷なしに嫉妬の苦悶に悩まされた。それやこれやで、夫婦は常に敵意を以て相對した。その敵意を、相互の情慾の満足でごまかす事によつて、淺ましい夫婦關係を續けて來た。ボズドマイシェフは云ふ。

「……二人の間の、常住に續く敵意は、理性によつて十分の理由を喚附ける事の出来るやうなものでは無かつたのでした。併し一層顯著なのは、伸直りの口實の無理由なことでした。時にはそれが言葉でした、辯疏でした、又涙でした。しかし喉には又——嗚呼、それを想ひ出す時に催すものは唯、嘔吐だ——お互に云ひ合つた酷い言葉の後に、突然として起る無言の誤差でした、微笑でした、接吻でした、抱擁でした。——ブイ、何の醜態だ！ どうして私は、あの時に、これ程の胸の悪さを見ることが出来たのでせう。」

かうして子を生んだ、子を生む事によつて放恣な肉體的快樂を妨げられる事を厭ひつゝ、「こんな豚のやうな生活を私はやつてゐました。」とボズドマイシェフは云ふ。しかも、こんな豚の様な生活をしてゐながら、彼は、他の女の誘惑を感じないといふ廉で、自分が純潔な家庭生活を送つてゐる様に空想

してゐたのである。而して、妻は妻で、子供の面倒を見る事は打捨て、おしやれをしたり家庭を外に社交的快樂に耽つたりしたが、洋琴の稽古に夢中になつて、或るヴァイオリン弾きと戀意になり、一緒に合奏したりなどする事もしばしばであつた。そのために夫の嫉妬は愈々強くなつた。ボズドマイシェフは云ふ。

「……私の中に特別の苦惱を喚び起したものは、私が疑問の餘地が無い事實としてかういふ事を認めたからでした——妻が、私に對して抱いてゐるのは、絶間無く、いらした感情ばかりで、それが唯稀に、習慣性となつた肉慾によつて中斷されるに過ぎないことを。それなのに、此の人間(ヴァイオリン弾きを指す)は彼の品のある外貌によつて並に彼の出現の新しいさによつて、併し主要な點から云へば、彼の疑ひもなく優秀な音樂的才幹によつて、合奏から産れる接近によつて、音樂が(特に絃樂が)感受性のある人間に刻み込む浸潤の力によつて——此の人間は、單に妻の心をとるばかりでなく、幾許の苦勞もなしに、屹度、妻を侵略し征服し、之をその指に巻き付け、彼がやりたいまゝに種々様々な眞似を妻と二人でやるに違ひ無いと言ふ事を。此事に眼を閉ぢるのは出来得無い事でした。」

彼は用事があつて田舎に行つた、ふと、留守宅で妻が何をしてゐるかが氣になり出した、自分の留守を幸ひにトルハチエヴスキ(ヴァイオリン弾き)がはひり込んで、妻と巫山戯てゐはしないか？彼は、トルハチエヴスキの品性の下劣な女蕩である事を知つてゐる。而して、殊に彼は、音樂といふものが、人間の情慾を咬り、肉感を挑發する恐る可き力を有つてゐる事を知つてゐる。彼は疑惑と不安とに驅られて、不意に自宅へ歸つた。而して、妻の部屋に跳り込んだ。果して、そこにはトルハチエヴスキ

イが居た。彼は、激怒のあまりに、短刀を揮つて、その妻を刺し殺して了つた——。

これが、此の一篇の梗概であるが、その疑惑と不安とに驅られつゝ汽車にのつて田舎にとつてかへし、自宅に走せ歸つて、妻の部屋に跳り込み、妻を殺して了ふ前後の描寫は、實に深刻を極めてゐる。その力強さ鮮かさ、讀む者の心は、覺えず打ち慄へるであらう。

「クロイツェルソナタ」の後語——トルストイの音楽論

トルストイは、後に、「クロイツェ

ルソナタ後語」を公にして、此の一篇に於て、如何なる思想を示したかを説いた。それは、「トルストイの男女觀」を説いた條に於て、詳細に説いた故こゝに繰返す事を止めるが、要するに、此の篇は、兩性問題、結婚問題に就いての、彼の嚴肅なる批判を寫したものである。戀愛とは單なる性慾に過ぎない、結婚とは、家庭的賣淫に過ぎない、婦人はそれが上流貴族の階級にあればあるほど、娼婦として男を誘惑する爲にのみ教育せられてゐる、又、子供は、甘い食物などと同様に兩親を樂ませる爲に養ひ育てられてゐる——これ等、彼一流の嚴しい揚扶が、此の篇に於て、偽善的な現代社會の上に加へられてゐるのである。また、そこには、科學に對する非難があり、惡しき科學を代表するところの醫師に對する攻撃がある。殊に、注目すべきは、音樂に對する激しい嫌惡と非難とである。「クロイツェルソナタ」は、人も知る如くベエトオフンの作曲の名である。この音樂の名を以て題としたトルストイの此作では、音樂に就いての彼の見解が頗る重要なものとなつてゐる。彼は、その「藝術論」に於ても、手厳しくベエト

偽善的な
現代社會
生活

トルスト
イの音樂
觀

オフンを貶してゐるが、此の篇では音樂そのものを滅茶苦茶に攻撃してゐる。姦夫トルハチエヴスキイを音樂師とし、妻の姦通を、音樂の蠱惑に歸してゐるが、トルストイに云はせると、音樂は實に性慾を喚び肉感を挑發するより外に何の能もないもの、無益なるもの、恐る可きものである。「彼等はベエトオフンのクロイツェルソナタを演つたのでした。」とボズドヌイシェフはいふ。

「あゝ、あゝ、……恐る可き怪物です、此のソナタは、……一體に恐る可き怪物です、音樂といふ奴は。」

音樂は精神を高揚させるといふが、それは唯、昂奮的に魂に作用する丈で、この興奮は盲目的である。

作曲家自身に於ては、この興奮には、特定されたる歸着點があるに違ひない。が、聽者には、その歸着點は示されず、唯昂奮だけが與へられる。この昂奮は盲目的の意慾となつて、人間の肉慾に交響する。

「かうした物は、唯、特定の重大な顯赫なる機會に際してのみ演奏を許されるのです。此の音樂に適應した、特定の行爲を遂行する必要がある場合に——演奏するのです、さうして遂行するのです。此の音樂の柄に叶ふ事を遂行するのです。併し、場所にも適應せぬ、實現の途を絶した感情のエネルギーを喚び起す仕事は破壊的に作用せずにはゐません。少なくとも、私の上には、此の樂曲が恐る可き作用を及ぼしました。」と、ボズドヌイシェフは云つてゐる。これは、トルストイの實際でなければならぬ。何故にトルストイが斯く迄に極端に音樂を恐れてゐたかといふ疑問に對しては、それはトルストイが殊に音樂に敏感であつたが故に、と答へる事が出来る。この答は、事實の上から立證されるのである。トルストイは

音樂と盲
目的昂奮

音楽を斥けた。これは、トルストイが一倍音楽を愛好し、その魅力を強く感じたからである。これは、人一倍肉慾が強く肉の誘惑を打克ち難いものと考へたが故に、殊に肉慾を拒否したのと同様の心理的経過と見る事が出来る。彼は、曾てショパンの第四バラッドを弾いた時、中途、感極まつて、「畜生！」と絶叫してその演奏を中止したと、モオドの「トルストイ傳」は傳へてゐる。かくまでにトルストイは音楽に敏感であつたのである。

絶対貞潔の理想

さて、トルストイは、「クロイツェル・ソナタ後語」に於て、此の篇の含める主張を摘示した時、絶対貞潔の理想といふ結論に達してゐる。而して後、彼は次のやうに云つてゐる。

私は今自分が言明してゐる此の確信に到達した時に、實に、最強の程度に於て此の感情を身に覺えた。私の思想の信仰が、私をその導いたところに導かうなどは、自分の聊かも豫期しないところであつた。私は自分自身の結論に驚懼した。私は此等の結論に信仰を捧げ度くないと思つた。併し、此等のものを信じない事は、出来得可からざる事であつた。

この「クロイツェル・ソナタ」を書き終つた時、此作の中に書かれた思想が、かくの如き峻厳なる結論に導かれてあつた事は、彼自身も亦驚いたところである。「——ボズドマイシエフの口から出る迄は、是等の思想は、彼の心の中にこんな明白に形成されては居なかつたのである。偉大なる創造者には屢々ある如く、創作が作家を運び去つたのである。藝術家が思想家を超越するのである。」とロマン・ロオランは

云つてゐる。クロボトキンが、彼を評して、「その藝術は常にその理論の彼方へ、以上へ行く。」といつたのとは、殆ど反對の意味でかう云つてゐるのである。こゝに、晩年のトルストイと、前のトルストイと兩者の藝術の上の差異が著しく見えるではないか。

「復活」

さて、次に「復活」が来る。「復活」は一八九九年彼が七十歳の時の作で、ゾボボル教徒の北米に移住する費用を作つてやる爲に書いたものである。トルストイが掉尾の大作で、ロマン・ロオランが云へる如く、これは或る意味に於てトルストイの藝術的聖書である。トルストイの思想のすべては、この一篇の中に悉く具體せられ結集せられてゐる。その筋は極めて簡單である。

娼婦マリスロワは、遊客なる金持の商人を毒殺して金品を盗んだといふ嫌疑を受けて裁判を受ける。その陪審官の一人なる公爵ネフリドフは、法廷にマリスロワを見て吃驚した。それは、自分が青年の日、之を弄んで捨てた一少女カチューシャの成れの果であつたのである。その頃若い青年士官であつたネフリドフは、出征の道すがら、伯母の家に立寄つた。それは復活祭の前日であつた。伯母の家に召使はれてゐるカチューシャといふ孤兒の娘は、ネフリドフが少年の時分に一緒に戯れ遊んだ事のある幼馴染である。伯母の家に立寄らうと思ひ立つた最初から、彼は彼女を手に入れようといふ野心を抱いてゐた。彼は、軍隊生活であらゆる放蕩の限を盡して、今は天晴の道樂者となつてゐる。無邪気な清い少女のまゝに愈々美しい娘となつたカチューシャは、さういふ心とも知らず、つい、強ひられて

ネフリ・ードフに身を任せた。

それは復活祭の夜、水面に張り詰めた氷が、びちびちと溶け砕ける、霧の深い夜のことである。ネフリ・ードフは、ひそかにカチューシャの寢間に忍び入り、彼女を抱いて自分の部屋へ伴れ込んで了つたのである。カチューシャは百年の命を捧げて心底からネフリ・ードフに思ひ込んだのだが、ネフリ・ードフの方はほんの一夕の出来心で、百留紙幣の入つた包をその手に握らせたまま、思ひ切りよく捨て去つて了つた。カチューシャは身持になつた。而して、主人の家から追ひ出された、彼女の墮落の生涯はここに第一歩を起した。妾となり、娼婦となり、今や七年の妓樓生活を重ねて、身も心も荒み切つてゐる。併し、正直な善良な彼女は、決して盗みや人殺しなどをするやうな者ではない、彼女は全く冤罪を受けて監獄に容れられたのである。

ネフリ・ードフは、今、罪人として法廷に引き出されたカチューシャを見て、昔の罪をおもひ返した。彼女を斯ういふ身にしたのは皆自分の罪である。彼女を救つて自分の罪を償はなければならぬ。かう彼は思ひ立つた。

墮落せるカチューシャ

ネフリ・ードフは、言葉を盡して、カチューシャの無罪を主張するが、法廷はこれを肯んじない。カチューシャのマアスロワは、慟哭して冤を訴へたが、果は自棄になつてどろともなれと思ふ。ネフリ・ードフは獄裏にカチューシャを訪うて、過去の罪を詫び、許して呉れとい

ふ。カチューシャは案外平気で、「何も償をするやうな罪はありませんわ。よし有つたにしたらところで、それはもう過ぎ去つて仕舞ひました。」と云つた。そして思ひがけなく彼を見て、不愉快な淫りがましい然し乍ら哀憐を乞ふやうな微笑を洩らした。昔の無気氣な心の清い娘は、今、男とさへ見れば媚を送つて、それを利用しようとするやうな女となつてゐた。彼女の前に立つた紳士は、最早彼女を愛してゐたネフリ・ードフではなく、たゞ彼女自身のやうな動物を必要とする時、それを使用する人間の一人であつた。「あの女は死んで了つた。」とネフリ・ードフは、曾ては美しかつたが、今では荒んで脹らんで、黒い、斜視の眼の中に輝く、さうな光によつて照らされてゐる彼女の顔を見乍ら思つた。彼は、必ず此の女を救はねばならぬと決心した。ネフリ・ードフの心持は、言ふまでもなくトルストイ自身の心持である。ネフリ・ードフについて、作者は次のやうに書いてゐる。

これまでもネフリ・ードフには、度々この所謂「靈魂」を浄めると稱する事があつた。この「靈魂を浄める」といふ事は、長い無反省、怠慢無頼の後に、本来の眞面目の生活の邪魔になつてゐた靈魂の塵埃を一掃しようとする時の心の状態を意味してゐるのである。かゝる覺醒の後にはネフリ・ードフは常に自ら規箴を作り、爾等は必ずそれに従はうと覺悟をし、二度と變るまいと願つてそれを日記に書附けるのであつた。英語で "Turning over a new leaf" (新しい頁を開く、の意) と自らそれを呼んでゐた。しかし、この言葉の利目も長くは續かず、何時の間にか再び舊へもどり、前よりも一層深く墮落するのが常であつた。

ネフリ・ードフは昔青年の血氣に任せて、事も無げに犯したその罪の結果のあまりに、なるをカチュー

ーシヤの生涯に見て、今や、斷じて新生活に就かねばならぬと決心した。彼は、貴族の娘との婚約をも破棄して了つた。而して、カチューシヤを救ふ爲めに、カチューシヤを眞人間に立戻らせると共に、自分も眞人間となる可く、その爲に一切の努力を捧げようと決心したのである。

ネフリードフは、カチューシヤの爲めに辯護士もつけてやつた、請願書も書いた、百方奔走したが、彼女の罪は遂にまぬかれ難いものとなり、西伯利亞へ送られる事となつて了つた。ネフリードフは、豫てから理想しつゝ、しかも實行躊躇してゐた財産の放棄を敢てし、身一つになつて、カチューシヤ等の囚人の一隊に跟着いて西伯利亞に出かけた。カチューシヤは、ネフリードフの此の心持がはじめのうちはどうしても判らなかつた。はじめ、監獄に彼女を訪うたネフリードフが、罪を許して呉れと繰返し、自分と結婚して呉れと請うた時、カチューシヤは憤然として怒つたのであつた。

「出ていらつしやい。私は罪人で、あなたは公爵様です、此處にはあなたのなさる事なんか何もありません。」と怒りに形相を變へて手を振拂ひながら怒鳴つた。「あなたは私をだしに使つて御自分の罪を救はうとなさるんです。」魂の中に浮んで來た考をあせつて表はさうと言葉を續けた。「あなたは此世で私を慰み物にして、來世では又此の私をだしに使つて御自身の罪を助からうとお思ひなんです。あなたの顔を見るだけでも胸が悪くなる——その眼鏡も、あなたのその汚い、ぶく／＼肥つたふくれ面も。出て行け出て行け！」と突立ち上つてから喚いた。

さうして、「あなたと結婚する位なら首縊つて死んでしまひます。」と叫び、「あゝ、あの時何だつて死んで了はなかつたらう？」と嘆いて、シク／＼泣き出したのである。併し、ネフリードフの眞情を知る

に及び、今は感謝の涙に咽んでゐる。而して、勿體ないと思つてゐる。ネフリードフの日記には次のやうな事が記されてあつた。「カチューシヤは私に犠牲を拂はせまいと思つてゐる。却て彼女自身が犠牲にならうと思つてゐる。彼女は打ち克つた。そして私もまた打ち克つた。彼女は私を幸福にして呉れる、私は輕々しくそれを信じはしないが、彼女の精神には今或る變化が起つてゐるやうに思はれる。その深い内心の變化に依て私を幸福にして呉れる。私はそれを信じるのを恐れてゐる。が、彼女は正しく眞實の生活に歸らうとしてゐるらしい。」

カチューシヤは西伯利亞の旅に立つた。ネフリードフの眞情に觸れて、眞人間の心を取り戻したカチューシヤは、次第に敬虔な、清らかな婦人となつて來た。ネフリードフは、今、カチューシヤに對して、深い憐憫の情を感じる。此の憐憫は、カチューシヤを酵母として、萬人に擴がつて行くやうな性質のものであつた。同じく西伯利亞に護送されつゝあつた囚人仲間にもシモンソンといふ國事犯人があつた。彼はカチューシヤを愛した。而して、結婚し度いといふ心持を、ネフリードフに告げた。「私があの女に戀をしてゐるとお思ひになつてはいけません。」と彼は云つた。「私はあの女を、苦勞をしぬいた立派な類稀れな人間として愛してゐるのです。私は、あの女から何物をも求めません。私は唯あの女を助けて、境涯を明るくしてやり度いとしん底から思つてゐるばかりです……。」

カチューシヤも亦、心密かにシモンソンを愛してゐる事を知つたネフリードフは、カチューシヤの

服役中、その傍についてゐて保護してやらう、而して、その後結婚しようといふ最初の計畫を抛ち、カチューシャをば、シモンソンに托し、自分は、更に他の苦める人々の爲に、萬人の救済の爲めに一生を捧げようと決心した。彼は福音書を繰返して讀んで基督教の教の眞義を理解した。

彼は終夜眠らなかつた。福音書を讀む人の大多数に有り勝ちなやうに、彼はこれ迄幾度も讀んだが注意しないで過ぎてゐた言葉の全意義を初めて會得した。彼は、總て之等の缺く可からざる、重要な喜ばしい默示をば、海綿が水を吸ふやうに吞み入れた。彼の讀んだのは悉く熟知してゐることのやうに思はれた。そしてつと前から知つてはゐたけれど、十分に會得したこともなく又全然信じたこともなかつたものを、はつきりと識得したやうに思はれた。今や彼はそれを知り且つ信じた。若し人々が是等の法則に従ふならば、彼等は必ず彼等に有り得る限りの最高の幸福を得るに違ひ無い、と云ふ事を識り且つ信ずるばかりでなく、彼は又總ゆる人間の唯一の義務は是等の法則を完うすること、人生の唯一の合理的意義は此の内に存すること、夫から之等の法則に反く者は悉く誤りであつて、應報は立地に至ることをも識り且つ信じた。此事は全幅の教訓から流れてゐた。そして葡萄園の比喩の中に最も力強く説いてあつた。

農夫等は主人を忘れ、主人のあることを思ひ出させるものは悉く殺して、主人の爲に働くやうに遣はされた葡萄園は自分等自身のもの、其内にあるものはみんな自分等の爲めに作られたもの、自分等の仕事は此の葡萄園で楽しく暮すことだと思つた。

「我々はそれと同じことをしてゐるではないか。」とネフリエードフは思つた。「我々が自分の生活を支配するものは自分であると思ひ、又生活は享樂する爲めに興へられたものであると考へるならば、蓋し夫れは明かかに誤謬であることだと思つた。」

「我々は或る者の意志によつて、或る目的の爲めに此世へ送られたのであつた。然るに我々は、自分が生きてゐるのは偏へに自分自身の享樂の爲めである、と深く思ひ込んで了つてゐる。丁度労働者が主人の命令を果さなかつた時と同様に、我々が不幸な目に會ふのは當然である。主人の意志は是等の法則の内に表白されてゐる。人々は是等の法則を完うするならば、忽ちして、天國は地上に建設せられるであらう。そして人々は彼等が得られる限りの至大なる幸福に到達するであらう。(天國と神の正義とを求めよ、總てのものは従つて得らる可し。)けれども我々は總てのものを求めて明らかに得る事に失敗してゐる。」

さて、此處にこそ——我が生涯の務めがある。一つの仕事了るか了らぬうちに、別の仕事が始まつてゐる。」

其夜はネフリエードフにとつては全く新しい生涯の曙であつた。だが、夫れは新しい生活状態に這入つたからではなくて、其夜以後、彼は總ゆるものが新しい、前とは全く異つた意味をもつてきたからである。

彼の生活のこの新紀元がどんな風に終るか、獨り歲月によつてのみ證明せられるものであらう。

トルストイの藝術的聖書

「復活」の一篇は、斯くの如く結ばれてゐる。まことに、此の一篇はトルストイの全思想全精神全宗教を、藝術の形式に結集せしめたるところの、藝術的聖書である。筋と云へば以上の如く極めて單純なものであるが、其間、彼は、事に觸れ物に應じてその所見を吐露し、一面より見れば、恰も一大論纂乃至一大訓話集たるの觀をなしてゐる。人物の描寫、心理の解剖、例によつて靈活を極めてゐると共に、その炬の如き眼光は、鋭く社會の缺陷に向つて注がれ、社會組織の缺陷に對する激烈な批評を篇中の隨處に見る事が出来る。殊に裁判制度や監獄制度について、彼は最も力を

注いである。カチューシヤを中心としての囚人の生活——その精細な描寫の中に、彼の徹底的な批評の眼が輝いてゐる。

單に藝術品として見ても、これは爛熟の限りに達した作であつて、その若きネフリードフが、處女カチューシヤを強要する夜の描寫などには、七十翁の筆になつたものとは思へぬみづ／＼しさがある。而して、彼の廣い愛は、すべての人物を皆偏りのない眼で見、その本然の姿のままに活かしてゐる。しかし、主人公ネフリードフだけは、ロマン・ロオランも云つてゐるやうに、十分の客觀的實在性を具へてはゐない。それは、トルストイ自身の理想を賦與した人物であるからで、「戦争と平和」のビエル・アンドレイ、「アンナ・カレニナ」のレヴィンなど、同様に彼の分身と見る可き人物にも、矢張、この憾みがあつたが、ネフリードフほどひどくは無かつた、といふのは、是等の人物はその境遇及び年齢に於てよほどトルストイのその時の心的状態に近かつたからである。併し、ネフリードフにあつて、作者は三十五歳の享樂慾の強い一紳士に、七十翁の肉を離れた靈を宿らせてゐるのである。そこに、著しく拵へものめいた點が見えるのは實に止むを得ない事である。その他、この篇に附けた作者の宗教的結論が此作の自然なる有機的發展に添うてゐないといふ非難も免れ難いものであるが、併し、トルストイは教訓とか主張とかいふものを先づ頭に置いて、此の作を書いたのである以上、この非難は、難する者の無理に歸す可きであらう。

(三) 發表せられたる遺稿

トルストイの遺稿 以上で、略々トルストイの作品（通俗物語と戯曲とを除く）について語り盡したが、なほ、彼の死後、遺稿として發表せられたるものの中に「ハチ・ムラアト」（一九〇一—〇四）「舞踏會の後」（七九〇三）「贗造手形」（一九〇三—〇四）「神父セルゲイ」（一八九一年—一九〇四年）等がある。その中で、量から云つても内容から云つても、「ハチ・ムラアト」と「神父セルゲイ」とが最も注目に値する。

「ハチ・ムラアト」

「ハチ・ムラアト」は、「戦争と平和」を思はせるやうな作である。高架索戦争の挿話を材としたもので、「ハチ・ムラアト」は、此の篇の主人公たる回々教徒の一勇士の名である。彼は、チエチエン人の爲に捕はれた妻子を援け出さんが爲に、露西亞の軍に降参した。しかし、背信なる露西亞軍は、最初の約束を反古にして、彼の爲に力をかさなればかりか、彼を抑留して悶々のおもひに悩ましめる。彼は、堪へ兼ねて、妻子を救ふ可く、露西亞軍を脱する。露西亞軍は、彼を叛意あるものとなし、彼に追手をかける。彼は、その忠實なる部下の數人と共に、奮戦して斃れる——といふのがその荒筋である。文明人と稱するもの却て非人間的の蠻行に耽り、未開人と呼ばるゝものに却て信義あり、まことの人道ありといふ事實を描いて、會て「コサック」に於てなせる如き、文明呪咀の聲を擧げたのが此の作であ

る。所謂、文明人の墮落を、未開な土民の生活との対照によつて明快に暴露したのが此の作である。而して、また、そこには、戦争といふ慘禍が、いかに無造作に人間の生活を、人情の尊きものを蹂躪するかを、強調したところに、彼の非戦論の具體的表現がある。この作は、彼が、一九〇一年から一九〇二年にかけて、「宗教とは何ぞや」の執筆に行き悩んでゐる傍（丁度、それは彼の重患の後であつた）、氣分を轉ずる爲に筆を執つた作で、ロマン・ロオランのいふ處に従へば、「彼は内部の要求なくして、全然身體的なる必要によつて」書いたものである。量に於てかなり大なる此の作も、無論力作といふ側のもではない、しかも、その技巧の圓熟、その表現の精巧、我等は、たゞトルストイの藝術的手腕の偉大におどろくの外はない。

「神父セルゲイ」

「神父セルゲイ」は、彼の晩年の苦悶を最も明かに具體化した作で、彼の家出を敢てした心持が、神父セルゲイなる一人物によつて、はつきりと語られてゐる。自叙傳的小説として、「幼年」「青年」等初期の諸篇と首尾を一貫するものと見てよい。神父セルゲイ——彼の名は、ステパン・カサツキイと云つた。美男子の侯爵で、禁衛の任に當る大隊長である。幼時から、非常な秀才で、勤勉家で、頗る矜持の高い、野心の強い男であつた。皇帝の覚えも目出度く彼得堡の上流社會にも持囃され、美貌の一女官と婚約を結んで、世の羨望の的となつたが、彼は、結婚の日どりの一月前に、突然辭職し、彼得堡を去つて身を僧院に隠した。彼は、約婚の少女、この美貌の女官、彼の聖徒の如く崇拜

してゐた女が、彼の身にも換へて敬愛する皇帝の妾であるといふ事實を發見し、失望して世を捨てたのであつた。僧院に入つて、或る高德の長老の弟子となつたが、人を凌がうとする心持は、こゝでも強く彼に働いた。彼は、學問にも修行にも人並外れて努力したので、こゝでも忽ち儕輩を抽んじた。併し、長老はステパン——今は法弟のセルゲイの、この驕傲の癖を悪んで屢々これを戒訪した。セルゲイは遣られて山の草庵に籠り、道德堅固に行ひすましてゐたが、しかし、二つのものがあつて、常に彼を苦めた。一つは色慾一つは懷疑である。或日、草庵を訪れた一人の淫蕩なる貴夫人が、彼を誘惑せんと試みた時、彼は斧を揮つて手指を切斷してその誘惑をしりぞけたほど克己自制に努めたけれど、後、ふとした心の弛みから、祈禱を求めに來た一人の白痴の娘を辱めて了つた。彼を誘惑せんとした淫蕩な貴夫人は、彼の堅苦の行を見て、其心を改め、出家して尼となり、神父セルゲイの高德の聲世に藉くの時にあたり、彼は此の邪淫の戒を破つたのである。彼は且つ恥ぢ且つ絶望し、僧院を迷ひ出た。彼は死なうとした。が、其時ふと、子供の頃一緒に遊んだ馬鹿な娘の事を思ひ出した。無邪氣な、世の中の惡といふものを知らない、其爲に始終他からいゝやうにされてゐた娘である。彼は、その娘を訪ねて行つた。娘はもう老婆となつてゐるが、その愚かしい心の中に包んだ清い魂は昔に變らない、彼女は苦みながら、他の爲に勞しながら、しかも、常に心の平安を失はずに行つてゐた。彼は彼女の前に懺悔して、「わたしは聖者ではありません、罪人です、いやな、穢らしい、迷つた、高慢な罪人です、人間の中で一番惡

いものよりもつと悪い人間です。」と云つた。彼は、その一生を顧みてかう感じた。

「——己はあのバシエンカ(その女の名)のやうに暮せば好かつたに、さうしなかつたのだ。己は陽に神の爲めに生活すると見せて、陰に人間の爲めに生活した。バシエンカは人間の爲に生活する積りてゐて、實は神の爲めに生活してゐた。己は人間に種々の利益を授けて遣つたやうだが、あんな事をするよりは難有く思はせようなどと思はずに、水でも一杯人に飲ませた方が増しだつた。一寸した善行の方が己の奇蹟よりは好いのだ。その辨己のした事にも神に仕へるといふ正直な心が少しは交つてゐたが。——成程、その心も無いでは無かつた。只世間の名聞を求める心に濁されて打ち消されてゐる人間の爲には、神も何も無い。己はこれから新に、神を尋ねなくてはならない。」

彼は、それより村から村へとさまよひ歩いた。其うち、旅行券を有つてゐない爲に、巡査に捕へられ、西比利亚に放逐された。西比利亚へ行つたセルゲイは、或る富裕な百姓に仕へて、主人の菜園を作る傍、主人の子供に讀書を教へたり、その家の病人を介抱したりした。——これが、此の物語の梗概である。此の物語のうちに、トルストイ其の人の痛切な懺悔を聞き得ぬ者は、よくトルストイを知る者では無さう。

「フエオドル・クウズミツチ老爺の遺した日記」

「フエオドル・クウズミツチ老爺の遺したる日記」の一篇も、「神父セルゲイ」に似た作である。皇帝アレキサンドル一世が、自分が死んだと思はせて宮中を脱出し、自ら罪を償ひ乍ら、偽名の下に西比利亚に老いるといふ、有名な傳説を材とした作で、こ

トルストイの企てたる隠遁

れは續けて書かれたならば、随分立派なものとなつたであらうが、惜哉、最初の數章だけしか残つてゐない。此の篇の主人公の企てたる隠遁は、亦實にトルストイの企てたる隠遁ではなかつたか。

「舞踏會の後」と「贗造手形」

「舞踏會の後」は、極めて短い物語で、或る老人の回想談に於て、彼が如何に若き娘を愛しいかにそれを捨てたかを語つたもの、彼は娘の父なる大佐が、一人の兵卒を鞭打させてゐるのを見て、その道徳的不快を、娘にまで移さざるを得なかつたのである。「贗造手形」は、かなり長い物語である。二人の學生が、ふとした出來心から、手形の文字をごまかし、二留を十二留として、小賣商人に支拂ふ。小賣商人は、それを農夫に渡す。贗造である事が知れて、農夫と小賣商人とに嫌疑がかかる。小賣商人は、自分がそれから免れる爲に、農夫を陥れる。農夫はそれから身を持崩して、無賴漢となる。かくて贗造手形からの結果は、更に轉々して次から次へと怖しいものに開いて行き、遂に最初の本元なる二人の學生に戻つて來て、學生は自分達を犠牲にして罪を償ふに至る、といふ筋である。物質界の如何なる一微動でも、それが何等かの動的變化を無限に連ねるやうに、日常行爲の少しの不徳でも必ずその連続的結果を起して行く。二人の學生の一寸した悪事が、勢力不滅の法則によつて極惡な倫理的結果を齎すといふ事を具體化した作品である。

「其の他の諸篇」

此外に、「痴人の日記」「惡魔」「母」「我が夢に見しもの」「ホディンカ」等があるが、ここで一々梗概を語つてゐる餘裕の無いのを憾みとする。

第二十講

通俗物語と戯曲

——トルストイの藝術(4)——

- 一、通俗物語……………(四三)
- 二、戯曲……………(四七)
- 三、トルストイの藝術の特徴……………(四八)

(一) 通俗物語

通俗物語

トルストイの作品に就いて、未だ語り餘してゐる處のものは、通俗物語である。

眞の藝術

トルストイは、その「藝術論」に於て、眞の藝術の如何なるものであるかを闡明した。眞の藝術は、宗教的感情を傳達するものでなければならぬ。或る特殊な階級のみならず、一般民衆に了解されるものでなければならぬ、その爲には、その形式が、明瞭で、單純で、簡潔でなければならぬ——かうトルストイは主張した。論に於て主張すると共に、トルストイは自ら筆を執つて此の種の藝術を製作した。その晩年に於ては、彼は、自身の述作の中、最も重きをこの種の通俗物語に置いて、之を世に薦めた。ある時、彼の僕が、彼に、その「幼年・少年」を請うたところ、「あんな腐つた本を読むものではない。その代りに」と、通俗物語の一冊をとつて與へたといふ逸話がある。此種の物語の重なるものを擧げると、

「腐つた本」

人は何に依つて生きる乎

(一八八一)

二老人(若くは二人巡禮)

(一八八五)

愛あるところに神あり

(一八八五)

イワンの馬鹿

(一八八五)

人はどれほど多くの土地を要するか

(一八八六)

通俗物語と戯曲

三人(若くは三人の讀者)

光あるうち光の中を歩め

臺のアリヨシヤ

子供たちへの話

(一八八六)

(一八八八)

(一九一〇、遺稿)

(一九一〇、遺稿)

ロマン
オラン
評語

其他、未だ澤山ある。これ等は、露西亞民間の傳説に材を採つたのもあれば、また新しく創作されたものもあるが、いづれも、極めて平易な言葉で書かれた、誰が讀んでも解ると同時に面白い物語で、その主題は皆愛の教へである、福音書の訓言である。ロマン・オランは、これ等を稱して、「これは近代藝術に於ける唯一無二の作である、藝術よりも高い作である。それを讀んで誰が文藝といふ事を考へよう。福音書の精神と、凡ての人間の同胞の純なる愛とが、民衆の教智のほゞ笑める淳朴によつて結びついてゐるのである。單純と清澄と、そして掩ひ難き心情の善良——時に如何にも自然に全幅の畫面を浸すあの超自然的光明——」と云つてゐる。

「人は何に依つて生くる乎」

見本的に二三の梗概を示さう。

「人は何に依つて生くる乎」は、最も代表的のものとしてゐる、讀まれた數から見ても、これが一番多いが、これも、民間の傳説から材を取つたものである。貧しい靴屋のセミオンは、冬着の毛の上着を買ふ爲めに、長い事かゝつて金を溜めた。で、或る朝それを持つて町に毛皮を買ひに出かけたが、足前

最も代表
的なもの

靴屋のセ
ミオン

にする豫算の靴の工賃を得意先で拂つて呉れぬ爲めに毛皮を買ひはぐり、白棄糞になつて一杯ひっかけた。ぶら／＼と家に歸る道すがら、禮拜堂の傍で、一人の品の好い若者が、裸にされて倒れたまゝ凍えかけてゐるのを見た。で、かあいさうに思つて、自分の着てゐた着物を脱いで着せて家に伴れかへる。女房は非常に不機嫌だつたが、夫から諭されて、機嫌を直して、その漂流人の爲に、ある丈の食物を出して食事を與へた。その中若者はにつこりと笑つた。若者は何處から來たとも、どういふ身分だとも一切語らなかつた、さういふ事は一切問うて呉れるなといふ約束をして、若者は靴屋の家に足を止めて職工となつたが、教へる通りに直ぐ覺えて、しかも非常にうまく靴を作る。それが近隣の評判になつて、靴屋は大繁昌、セミオンは小金を貯へるやうになつた。或る時一人の紳士が、上等の革を持つて來て、三年間丈夫といふ保險附の長靴を造れと命じて去つた。非常に尊大な様子をしてゐたが、若者は、紳士の背後の方を見てにつこりと笑つた。ほとんど口を利く事もない此の若者は、この時始めて二度目の笑ひを笑つたのである。若者は紳士の頼みの靴を造りにかゝつたが、それを長靴には造らないで、スリッパのやうに造りはじめた。セミオンは驚いて當惑して居ると、先刻の紳士の僕が走つて來て、先刻長靴を誂へた革でスリッパを造つて呉れ、主人は家に歸る途中橋の中で頓死したので、死骸に穿かせるスリッパが入用になつたのだと語る。それからまた年が過ぎて、若者がセミオンの家に居るやうになつてから五年目に、一人の婦人が、二人の女の子を連れて、靴を誂へに來た。二人の女の子のうち、一人の女の子は跋

靴を頼み
に來た紳
士

二人の女
の子を連
れた女

で片足が拗れてゐる。その二人の女の子は婦人の實の娘ではなかつた。六年前此の兒の父は山に出て木を伐つてゐる中、倒れる木に壓されて死に、その同じ日に母親は産をして死んだ、産まれたのは双子でそれが此の娘達である。跛になつたのは、死んだ母親が、その上に轉げた爲である。丁度隣に住んでゐた此の婦人は此の孤兒を引きとつて自分の子と一緒に育てたが、其後自分の子は死んで、養ひ兒の二人丈が残り、はじめは厄介にも思つたが、今は此の上もない慰めになつてゐるのだと、婦人は涙乍らに物語つた。傍で聞いてゐた若者の體から此時見る／＼靈光が射し、若者は天を仰いで微笑した。婦人が去つた後、若者はセミオンに御辭儀をして、而して云つた――

「御機嫌よう、友よ、神様が私を許して下さつた。汝もまた私を許して呉れるであらう。」

セミオン夫婦は、若者の唯の人間で無い事を知つた。若者は、天國のエンゼルであつた。神は彼に、一人の女の靈を求む可く地上に遣はされた、その女は丁度双生兒を産んでゐた。女は彼に哀願して、自分が居ないと、二人の子供が育てないから、自分の靈をとりあげる事は許して下さいと云つた。天使はそれに動かされて、女の靈をとらずに天國に歸つた處が、神はその不従順をお怒りなされて、

「行つてその母親の靈をとりあげて來い。そしてお前は三つの眞理を學んで來なければならぬ。お前は人間の性質の中には何があるか、人間に與へられて居ないものは何か？ 何によつて人は生きてゐるかを學べ。お前がそれ等の三つを學んだならば、そしたら天へ歸つて來い。」と命ぜられた。斯くて彼は、

天國の
エンゼル

三つの眞
理

拜堂の傍に倒れて居たところをセミオンに拾はれたのである。彼が學び得た三つの眞理の第一、何が人間の性質の中にあるかといふ事、それは、セミオンの妻が、怒りを止めて彼の食事を與へた時に學んだ。人間の性質の中には愛がある。で、其時、彼は微笑した。傲慢な紳士からは、第二の眞理、何が人間に與へられてゐないかを學んだ。人間は肉體に、必要なるものを知る力は與へられてゐない。で、その時彼は二度目の微笑を洩らした。今、二人の孤子を育てた婦人を見て、第三の眞理、即ち何によつて人間は生きてゐる乎を學び得た。人は何人でも自分の力によつて生きてゐるのではなく愛によつて生きてゐるのである。

自分は今三つの眞理を學び得た。天國に歸る時が來た。――かう語つて天使は天上高く飛び去つた。

其他の小話

かくの如く、極めて淺俗な物語の中に、トルストイが生涯の苦悶を以て贖ひ得た深遠の眞理が含まれてゐるのである。「火を等閑にせば」といふ小話には、「汝に逆ふ者に復讐する勿れ。」の教訓が含まれてゐる。「イワンの馬鹿」及び「蠟燭」といふ小話には、「汝に惡を爲す者に抵抗する勿れ」の教、即ち無抵抗主義の教が含まれてゐる。「教子」といふ小話には、「復讐は我ものなりと宣言ふ」の教が含まれてゐる。その他皆、トルストイが體得したる福音的道德の教を含んだもので、これ等のみを以てしても、トルストイの思想と宗教の大體を窺ふ事が出来る。トルストイは、是等の物語によつて、最も廣い接觸面を民衆に得た。實際、これ等の物語ほど、露西亞は云ふに及ばず、世界各國の民衆に廣

「イワ
ンの馬鹿」

最も廣
い接
觸

く讀まれた著作は、他に例が無からう。一九〇八年即ちトルストイが歿する二年前の統計を以てしても、「人は何によつて生くる乎」は十五萬を賣り、「人は幾許の土地を要するか」は十三萬を賣つてゐる。

(二) 戯曲

戯曲家としてのトルストイ

トルストイはまた戯曲にも筆を染めてゐる。次の六篇の作がある。

- 闇の力
- 最初の醸造者
- 文明の果實
- 光間に輝く
- 生ける屍
- 凡ての禍彼より

- (一八六六)
- (一八八七)
- (一八八九)
- (遺稿)
- (遺稿)
- (遺稿)

右のうち最も、有名なるは、「闇の力」の一篇で、戯曲家としてのトルストイを代表するもの、トルストイは實に此の一篇によつて、世界の最も偉大なる戯曲家の一人たる地位を勝ち得たのである。セルゲエンコは、「彼の作品中何れのものもこんなに容易に彼の手から離れたものは無かつた。」と云つてゐる。非常に充實した感興を以て一氣に書かれたものであらう。四十歳過ぎてから初めて戯曲とい

トルストイの戯曲

ふものに興味を持ち出した彼は、シエタスピヤ、モリエル、ダエチ、プウシユキンを讀み耽つた。「私はソフオクレスやユーリピデスをも讀み度いと思ふ。——私は體の具合が悪いので、長い間床を離れずに居た、——そして斯ういふ時は、戯曲的な人物や喜劇的な人物が澤山私の心の中で動き出すのである。……而して中々うまく働く。」一八七〇年頃のフェットへの手紙にはかう書いてある。それから、十五年を経過して、枯草車から落ちて脚に怪我をして病床に横つてゐた間に、彼は此の作を書いたのである。戯曲としては、これが處女作であつた。

「闇の力」の梗概

「闇の力」別に「爪牙一度撃たば、この鳥命危からん」といふ名がある。これは聖書の句「惡魔に一指を渡すものは、その手をも奪はる可し。」といふ句と同じ意味である。ニキタといふ一人の若い農夫を主人公として、人間獸性のどん底を描き、そのどん底の裡、なほ銷し盡くさざる光明あつて、よく靈魂の墮落を救ふの次第を、四幕に仕組んだものである。

富裕な病身の百姓ベエトルの後妻アニツシヤは、下男のニキタと不義の戀に落ちてゐる。ニキタは、男振の悪くない洒落者で、謂はゞ田舎のドンファンで、一方、孤兒のマリンカとも關係がある。ニキタの両親がやつて来て、ニキタを家に戻らせてマリンカを嫁にとらせると聞いて、アニツシヤは氣を揉み出す。ニキタが、それは自分の望むところでは無い事を語り、アニツシヤをなだめて居る所へ、ニキタの母マトリオナが来る。これは、奸曲な狡猾な、惡魔をさながらの老婆で、ニキタをアニツシヤに入夫

ベエタ
とアニツ
シヤ
マリンカ
マトリオ
ナ

ニキタ

アキム

せしめる爲、ベートルを毒殺せよとの旨を諷して、アニッシャに毒薬を渡す。そのあとへニキタの父親のアキムが来る。それはマトリオナとは眞反對な、その滑稽な外貌の中に神を包んだ、敬虔な善良な信心深い老爺で、ニキタに説いて、孤兒のマリンカと結婚せよと勸める。ニキタは、マリンカとは關係は無いと白ばくれ、神の前に誓ひを立つて、マリンカとの關係を否定する。そのあとでやつて来たマリンカは、ニキタの情無い言葉に泣かされて、恨みの言葉を残して立ち去る。これが第一幕である。

第一幕より六箇月の後、ベートルは病、益々重る。アニッシャは、マトリオナから貰つた毒薬を薦めたのである。ベートルは病苦に悶えて犬のやうにのたうち廻つてゐるが、何人も深切に看病する者は無い。マトリオナが遣つて来て、アニッシャに、もう一杯毒を呉れて早くベートルを殺し、ベートルが妹に渡さうとして隠し持つて居る金を奪へとすゝめる。その通りにして奪つた金を、アニッシャはニキタに渡す。これで第二幕が終る。

アクリーナ

第三幕は、それから更に九箇月を經過した後である。ニキタはアニッシャと夫婦となり主人公になり済ましたが、生來の放蕩性を發揮して、盛に道樂をやる、町の飯屋に入り浸る、其上、義理の娘のアクリーナをも妾のやうにしてゐる。今日もアクリーナを連れて町へ遊びに行つた後、アニッシャは獨り悶々の情に苦んでゐるところへ、アキムが来る。そこへ泥酔して歸つたニキタは、アクリーナとアニッシャとの嫉妬喧嘩にアクリーナの肩を持つて、アニッシャを出て行けがしにする。傍で惱々し乍ら此の様を

ニキタの苦悶

見てゐたアキムは、我兒の墮落を悲み、死んだ馬の代りを購ふ爲に金を借りようとして来たのだが、その借りた金をも返し、皆がとめるのも肯かすに、雪の夜道を歸つて行く。一旦歸りかけたアキムは、再び戸口から顔をさし入れ、「正氣になれよ、まあ、お前の靈の事を考へて見る。」と捨白して立ち去る。ニキタはもと／＼悪人でないから自分のしてゐる事のいかに淺ましい事であるかをよく知つてゐる。而して、始終心が咎めるので、それを紛らす爲に酒を被つてゐるのである。今も、風琴でも弾いて氣を紛らさうとしたが、それも駄目、遂に苦しいと叫んで泣き出す。

第四幕——アクリーナが村の者と結婚する事になり、先方の両親が、アクリーナを見に来たが、丁度其日はアクリーナはニキタとの間の不義の子を産む日であつた。例の悪智慧のマトリオナは、先方の両親をごまかして歸したが、その中に子が生れる。ニキタは養育院に遣らうと思つたが、アニッシャが承知せず、マトリオナと一緒に、それを土窖の隅に埋めて了へと強要する。ニキタは且つすかされ且つ威嚇されて、とう／＼自分の子を、暗い土窖の隅でおし潰す。ニキタは良心の呵責に、罪の自覺に責められて、もう狂氣のやうになつて了つた。

ニキタの子殺し

「何をしやがるんだ。人に何をさせやがるんだ。どうだ、彼奴の泣いた事は、上から踏みつけたら、氣味の悪い聲をしやがった。どうも中々死にやがらねえ。まだ生きてゐる。確かに生きてゐる。」(さう云つて耳をすまして)「おやハイ、云つてゐる、さうだ、まだハイ、云つてやがる。」

ニキタは土著の戸口に聞える。アニッサは自業自得だ、いゝ氣味だと嘲笑する。ニキタはそこに身を投げて、「俺あ一生取返しのか無え事をしまつた。もう俺や助かりやうが無え。何故斯んな事をさせたんだ。俺やどこへ行つたらいいんだよ。」と慟哭する。

第五幕——丁度此日はアクリーナの結婚式の日である。ニキタは式に列してゐたが、心苦しさに堪へきれずに密と庭へ逃れ出る。その時、既に結婚してゐるマリнкаは、式に列してゐる夫を用事の爲に一才呼ぶ可く丁度そこに來合せる。ニキタはマリнкаに向つて、種々昔の話をし、その樂しかつた昔に較べて今の心の苦しさを打嘆く。マリнкаが去ると、マトリオナとアニッサが、ニキタを探しに出て來て、主人が行かなければ式の祈禱が出來ないから、是非來て呉れと云ふ。ニキタは、あとから行くと思つて二人を追ひ遣る。ニキタはふと思ひ附いたやうに、枯草の上に坐つて靴を脱ぎ、「フン、人が行くと思つてゐるのか、厭な事だ。梁の上でお目にかゝらあ。繩を結んで飛び下りた時分に遣つて來い。難有い。こゝに繩がある。」と考へ込んで、「あゝ。外の屈托ならどうか仕やうもあるんだが、この苦勞ばかりや心中に深く喰ひ込んで居やがつて、撈り出す事が出來無えんだ。」斯う獨言ち乍ら繩を掴んで引張ると、その繩の端は先刻から藁の中に埋もれて酔ひ倒れて居た老僕のディミトリッチに握られてゐた。ディミトリッチは、くだを巻くやうな調子で、「人が怖えつて理窟は無え。これ、この通りの人間だ。私や人間が怖く無えもんだと思ふと氣持がさつぱりするんだ。どうですか分りましたかい。さあ、づん

ニキタの
悔悟

ディミトリ
ッチ

づんやつつけませうて。」といふ。ニキタは、「さうだよ、實際だ、俺だつてまつたくさうだ。」と繩を投出す。——ダアク・チエーンジ。ニキタは多くの人々の居る中へ、父のアキムと共に跣足で登場する。而して人々の驚きと、アニッサとマトリオナの狼狽とのうちに、今迄の罪惡の一切を自白する。アキムは悦んで、「おゝニキタ、残らず悔いて了へ。すれば其の苦しい胸が軽くなるぞ。神様に懺悔するのだぞ。人間の前で憚る事は無いぞ。それが神様の御意だ。さうだ、さうだ——」と激ます。而して、その前に跪く子を胸に抱いて、「お前は自身には用捨無く、さう懺悔をしたのだから、神様は屹度愍んで下さるよ——屹度赦して下さるよ。さうだ——神様は——」ニキタは縛めにつく。而して、辯解しようとするアクリーナを止めて、「皆私一人の爲た事です。罪人は私一人だけです。」と云ふ。これで、此の劇は終つてゐる。

ニキタの
懺悔

「闇、カ」の藝術的價值

實に力強い作品である。惡に感染し易き、人間の肉的感覺的方面の性質と、惡に打克つ可き靈的、神教的の方面の性質との動搖及び開展の心理描寫の精巧を盡したるが中に、彼の人生觀が、十分に具象されてゐる。アサア・シモンズは、此の劇こそ、「苦惱を通じて人間の精神を淨化する」といふアリストオトルが希臘悲劇に下した定義を、遺憾なく具へた稀有の傑作として、此の劇を讚嘆してゐる。而して、彼の最初の作であるにも拘らず、自然主義的な作劇法の一の模範として、世界の劇壇に一新境を開いたものと云はれてゐる。——而してこの作に於て注意す可きは、農民の言

ア・ア
シモンズ
の批

葉を自由に驅使した點、農民の語法を十分にとり入れた點である。トルストイの殆ど天性に出づるともいふ可き、民衆的傾向は、夙に、民衆の言語を愛するやうに彼を導いた。彼は、農民の言葉に、藝術的の價値の多くを見出した。「民衆の言語は、詩人が言ふ事の出来る凡てのものを表現す可き音を持つてゐる。」と彼は云つてゐる。で、その農民の言葉を以て、彼は多くの通俗物語を書き、又、「闇の力」を書いたのである。單に用語の上からばかりでなく、「闇の力」の中に、我等は、トルストイの心からの民衆化、農民との一致渾融を見る事が出来るのである。

ニコライ・コサリンツ

「闇に輝く光」

「闇に輝く光」は、五幕の戯曲で、その主人公ニコライ・イワノウィッチ・サリンツは、「我等何を爲す可きか」の著者その人である。彼は此の劇に於て、その晩年の苦悶、神の愛と家族の愛との間に苦む彼自身の苦悶を最も露骨に描き出してゐる。彼の妻の涙は、彼を支へて、彼の家を去るのを許さぬ、彼は家にとゞまつて手工などをやつてみじめに生きてゐる。彼の妻子は、彼の教へとは反對に、豪華な生活をして、始終、宴會などをやつてゐる。彼はそれに與らないが、併し、他の彼の偽善を責むるを避ける事は出来ない。一方、彼の道徳的影響は、彼の周圍に多くの信者を集める、信者の一人なる若い男は、彼の主義を奉じ、兵役を拒否して軍隊の懲罰隊へ送られそして憐む可きサリンツは、自分が誤まつてゐるのでは無いかといふ疑惑に苦められる。自分は、徒に他人を驅つて苦痛に陥れてゐるのではなからうか——この疑惑に悩む心持は、トルストイの家出以前の心持である。

トルストイの家出前の心持

「生ける屍」

「生ける屍」は、頹廢なる社會的機關によつて壓し潰された、弱い善良な人達を描いた戯曲である。主人公フ・ードル・ワシリ・エウイッチ・プロタソフは、妻のリサが、自分の親友の、カレニンを愛してゐる事を知つて、苦悶する。貞淑なりサは、勿論そのカレニンに對する戀を抑へて、忠實に仕へては呉れるし、カレニンも、リサに對する熱愛を抑へて、親友の誠を盡して呉れるのだが、二人に深切にさればされる程、フェエチャ（フ・ードル）は苦しいのである。自分があるが爲めに二人は不幸なのだ、自分は他の幸福の邪魔する人間だ、世の中に不用な人間だと考へ、又、自分の最愛の妻が、眞心から自分を愛してゐるのでない事を考へ、彼は、自棄氣味になつて酒色に沈溺する。彼は、妻と親友の幸福の爲めに斷然妻を離婚しようとするが、併し、離婚には其理由が無ければ、法律がそれを許さない、世を偽り自分を偽つて偽りの理由を拵へる事は彼には出来ない。そこで、死んだ風を装ひ、生ける屍となつて身を隠す。しかし、ほんとに死んだので無い事が分り、リサとカレニンが離婚の罪に問はるゝに至り、フェエチャは遂に眞實に自殺する——といふ筋で、結婚制度の缺陷といふ一點に對つて痛撃を加へた戯曲である。

フェエチャ

「文明の果實」其他

「文明の果實」は、諷刺的の喜劇である。「最初の醸造者」と、「すべての禍彼より」は、いづれも農民の爲の小喜劇で、酒の害毒を主題とし、禁酒の教訓を含めたものである。

(三) トルストイの藝術の特徴

四五八

トルストイの藝術家としての素質 最後にトルストイの藝術家としての素質といふやうな點に就いて一瞥して置き度いと思ふ。トルストイは、豫言者である、大宗敎家である、偉大なる人類の教師である。一藝術家の稱を以て彼の全部を掩ふ可く、彼は餘りに偉大に過ぎる。しかも、斯くの如くあらゆる方面に於て偉大なるトルストイの、最も偉大なる一面は？ といへばそれは藝術家としての一面である。これは、一般の定評である。

然らば、トルストイは如何なる藝術家であつたか？ その答へは、上來説き來つたところに於て、既に内容的に、十分明かにし得たと思ふが、之を一言に盡して、彼は現實主義の藝術家なりや、理想主義の藝術家なりやなどの定義を求める段になると、そんな何々主義といふやうなもので一括す可く、彼の藝術はあまりに偉大であり、あまりに複雑であつたと云はねばならない。彼の場合のみでなく、すべての偉大なる藝術家は、主義といふやうな二の型にあてはめる事は出来ないものである。トルストイは、現實主義の藝術家でもあれば、理想主義の藝術家でもあつた。自然主義の藝術家に共通する點をも多分に有つたと同時に、また、紛れもなき人道主義の藝術家であつた。

現實主義と理想主義

ブランドスは、彼の作に、自叙傳的のものゝ多きを見て、是れを、彼が極

何よりも
先づ偉大
なる藝術
家として

トルスト
イの現實
主義的傾
向

端に事實を重んじて空想を避ける現實主義的傾向に由來するものとなした。實際、彼の藝術は、強い現實主義に根ざしてゐる。現實尊重といふ點に於ては、彼は自然主義者と共通してゐる。彼は人性の暗面に向つて用捨なき揚扶をなした、科學的精確を以て人間心理を解剖した、これ等の點から見れば、彼と、自然主義の藝術家等との間に何の異なる點もない。しかし、一方、彼は熱烈なる理想の追求者であつた、彼は、西歐の自然主義者等のやうに、人生を唯、物質のみなりとし、機械的定命觀の下に首を垂れて、無理想無解決にあきらめるやうな態度とは正反對な態度の上に、その藝術を打ち建てたのである。ロマン・ロオランは云つてゐる。「……彼の明晰な視力と、恒久の幻想はこの中にある。彼は民衆を缺點なき現實主義を以て觀察する、併し、彼が眼を閉ぢると直ぐ、彼の夢は彼を捉へ、彼の人類の愛は彼を捕へる。」然り、明晰な視力と、恒久の幻想——こゝに彼の特色があり、彼の藝術の特色がある。彼は明晰な視力を有する現實主義者であると同時に、恒久の幻想の所有者たる理想主義者であつた。缺點なき現實主義を以て觀察する自然主義者であると同時に、人類の愛を高調する人道主義者であつた。

メレジュコフスキイの評語——肉の洞觀

メレジュコフスキイの「人及び藝術家としてのトルストイとドストイェフスキイ」は、トルストイ論中最も重要なものゝ一つに屬するが、その中で、メ

レジュコフスキイは、トルストイの藝術を論じて詳細を極めてゐる、而して、又頗る正鵠を射てゐる。次に、その主意だけをこゝに紹介して置き度いと思ふ。

メレジュコフスキイは、トルストイの藝術の技巧——やがてこれ、その本質である——の特色として、「肉の洞観」といふことを擧げてゐる。「肉の洞観」とは、肉を描く事によつて靈を髣髴する事である、容貌とか動作とか表情とか、その外面に表はれたる肉體上の特色を描く事によりその内面の精神状態乃至靈的生活に迫つて行く事である。トルストイは、斯くの如き爲方に於て無類の手續オペレントを有つてゐる、と彼は云つてゐる。

たとへば、「戦争と平和」に出て来る人物の一人、アンドレイ公爵の妹なるマリヤを描くに、「あれは公妹マリヤの重々しい歩みであつた。」「踵で歩きつゝ重々しく足を運んで。」「彼女が赤くなると顔に斑點が出来る。」「彼女は激した——彼女の顔は赤く斑らになつた。」「等の描寫を以てしてゐるが、此の「重々しい歩み」をする無器用な歩調おろおろは、彼女の身體全體に、女性的な魅力といふものが一つもない事を示す。その赧あはれなる時の顔の斑點は、彼女の内なる美しさ、その心の純なる淨きよさを示す。

同じく「戦争と平和」に、トルストイがその純粹の露西亞精神の代表者、その理想の英雄として描いた總司令官クツゾフは、肥満した重い體と、老人らしい遲鈍さと懶さとを有つた人として描かれてゐる。さうしたクツゾフの外貌は、直に、彼の物に恐れぬ、沈思しんし的なる心の不動、基督教徒的と云はんよりは、

マリヤの
描寫

肉の洞観

クツゾフ
の描寫

更に佛教徒的なる自己の自由意志の抛棄、運命若しくは神の意志に對する服従を表現してゐる。

又同じく「戦争と平和」の中に、ピエルが捕虜になつてゐる中、同じ捕虜仲間に見出した老兵プラトン・カラタエフといふ人物があるが、これは、彼がクツゾフよりも更に完全なる理想化を以て描き出したる露西亞的英雄である。絶対忍従、絶対無抵抗主義の權化たるカラタエフは、作者の理想の極致をつくして描いた圓滿の人格である。此の人物を描くにトルストイは次のやうな描寫を以てしてゐる。「——また、その男の臭氣におひの中にも、心持のいゝ慰めるやうな、圓味を帯びた何物か、ピエルに感じられた。」「佛蘭西の外套を着け、繩紐を締め、軍帽を被り、草鞋を穿いたプラトンの姿は、どう見ても圓かつた。頭が全然圓かつた。彼の有つてゐた脊中も、胸も、肩も、手も、何時でも何かを刎かうとしてでもゐるやうに圓味を帯びてゐた。氣持のいゝ微笑も、大きな蒼色の優しい眼も圓かつた。」「かうトルストイは、プラトン・カラタエフの人物を描くに「圓い」といふ屬性を以てした。この「圓さ」は永遠にして動き無き單純なる者、自然と一致するすべての世界、纏まれる、體型的にして完全なる世界を表示するものである。彼は、「圓い」といふ、幾何學的の單純と明瞭との極度を示して居る身體上の特徴に依つて、大きな抽象的の普遍を示してゐる。「而して、この普遍化は、唯だトルストイの藝術的方面のみならず、宗教的形而上學的方面をも籠めた創作全體の内部の根本思想と結合されて居る。」と、メレジュコフスキイは言つてゐる。かうした例は一々枚擧に暇が無い程澤山ある。もう二つ三つ擧げると、「アンナ・カレニナ」の女主人

プラトン・カラ
タエフの
描寫

公アンナの描寫に於て、トルストイはアンナの手を描く事によつて、その全性格を髣髴させてゐる。メレジュ・コフスキイは言つてゐる。「アンナ・カレニナの手に於ては、トルストイの小説中の他の人物のそれに於ける如く、顔よりも更に著しい表情がある。(これは恐らく人間の身體の中で、手が唯一の露出した部分だからであらう。)アンナの手には、アンナといふ人間の總ての美、即ち力と優しさとの一致がある。」トルストイは感情の豊富な、聰明な、優婉なアンナの手を、「彼女が固く烈しく振つた特に力の籠つた握手」と書き、「力ある小さな手」と書き、「白い尖細の指」と書いてゐる。「力のある、小さい、尖細の指を有つた手」——我等は、此の手と共に、アンナの全面目を想像する事が出来るのである。又、トルストイは人間の動作の單純な一見何でもないやうな或る描寫の中に、非常に複雑な意味を寓する事を知つてゐる。「戦争と平和」の中で、ポロディノの大戦を描いた條に、負傷者を收容する天幕の中で、血にじんだ前掛を、又、血だらけの手をしてゐる一軍醫が、「葉巻煙草を汚さぬやうに、片方の小指と拇指との間にそれを持つてゐる。」と書いてゐる。この葉巻を挟んだ指は、患部の切斷その他の外科手術の恐ろしい仕事の間斷無く行はれてゐる事、しかし、軍醫たる彼はさういふ恐ろしい仕事を嫌はぬ事、傷や血に對しても、長い間の習慣の結果で、もう平氣になつてゐる事、併し、かなりそれに倦きて、何か別の事を考へ度いといふ願を有つてゐる事などを語つてゐる。「此等のあらゆる感情の全體は此の一場の肉體の密畫に、即ち半行の中に描寫せられた二本の指の位置に含まれてゐる。」と、メレジュ・

コフスキイは言つてゐる。

肉を通じて靈を描くこと——魂的人間

斯く、外面を描く事によつて内部を暗示する事、外面にあらはれたる容貌や動作や表情を描く事によつて、心理を、性格を描くこと、これを要するに肉を通じて靈を描く事に於て、トルストイは實に並び無き才を有つてゐる。その肉を通じての洞察は、時にやり過ぎてゐると思はれる事もある。内部と外部との交互的結合をつきとめようとする彼の手法が、あまり精密に過ぎる爲めに、時に物それ自身の有つ自然性を失ふやうな場合も無いとはいへない。トルストイの友人ドルウジニン——この人は、傑れたる批評家で、トルストイの藝術は、此の人の批評に影響された點が少なくない——は、此の點を指摘して、「君は、時に某の腿は印度に旅行しようと思つてゐる、とても書きさうだ。」と云つて諷した事があるが、さうした弊も慥かにあつた。

使徒パウロは、人間を三つの部分、即ち肉的和、靈的和、魂的とに分けた。魂的といふのは、肉的和靈的との中間の部分で、一面肉に接し、一面靈に通ずる部分を指す。即ち半ば動物的にして半ば神となるもの、肉體的なると同時に精神的なるものである。肉を通じてその中に靈を髣髴するトルストイの技は、即ち、三つの部分の中、何よりもよく魂的部分を描き得てゐる。「トルストイは、此の魂的生活の最大なる描寫者である。靈に向ふ肉のかの方面、肉に向ふ靈のかの方面——動物と神との間の戦が烈しく戦はるゝかの秘密に富める境地の描寫者である。」とメレジュ・コフスキイは云つてゐる。而して、メレジュ・

「魂の人間」

トルストイ其人の本質

フスキーは更にかう云つてゐる。「これは彼自身の生活の悲劇である。——彼は特に勝れて『魂の人間』である、異教徒でなく、完全な基督教徒でない、蘇れる、變化しつゝある半異教徒、蘇つて然かも基督教に歸り得ざる半基督教徒である。」

トルストイその人の素質を見る時、我等は此の評語に首肯せざるを得ない。トルストイはたしかに、大なる魂的人間であつた。トルストイの藝術上の技巧の特色は、やがて、トルストイその人の本質である。

トルストイの短所

魂的人間を描いて、無類の筆を有するトルストイも、一度靈的人間の抽象的心理に入るや、忽ちそこに躓きを見る。フロオベルは、「戦争と平和」を評して、最初の二巻は非常にすぐれてゐるが、第三巻の哲學的考察を交へたところへ來ると恐ろしく落ちると云つてゐるが、この哲學的考察、即ち靈的人間の抽象心理の描寫には、彼はいつも失敗してゐる。ピエルや、レヴィンの描寫が、著しく見劣りする所以である。彼は小説でなしに、幾多の論文を書いて、彼自身に此の哲學的考察を逞しうしてゐるが、彼の論文が、論文それ自らとしては、彼の小説ほどの力の無いといふ事實も、これとその所以を等しくするものである。彼は哲學的考察に短であり、その叙述に短である。これ等のことは、彼自ら、魂的人間であるといふ事實を證據立てるものでなくて何であらう。

メレジュ・コフスキイは、更に、トルストイが文明史的觀察に貧しい事を、「戦争と平和」を材にとつて

哲學的考察及貧窮の批判

「戦争と平和」の缺點

メレジュ・コフスキイの批評

指摘してゐる。「戦争と平和」は歴史小説である。よし、それは甚だ遠い過去ではないにせよ、兎に角、過去の事を書いた小説である、然るに、あの作には、時代の色といふものが書けてゐない。歴史の色といふものが無い。「戦争と平和」に於て我等の呼吸せしめられる空気も、「アンナ・カレニナ」に於て我等の呼吸せしめられる空気も、全然同一である、トルストイの描き得るところは、その特殊の社會の一員として、特殊の教養を受けた人間ではなく、一個の人物として、精神的動物(?)としての人間である。社會を背景とした人間ではなくして、自然を背景とした人間なのである。最も原始的なる魂的人間なのである。メレジュ・コフスキイは云ふ。「ボヴリイ夫人(フロオベルの小説の主人公)の讀んだ愛の情熱を描いた諸書及び此等の書が、如何に彼女自身の戀情の發生と發展とに影響したかはよく分る。けれども我等は、アンナ・カレニナか、レルモントフか、プーシキンか、チュツチエフか、バラトインスキイか、何を多く好みしかを探索するは無益であらう。かくも泣き又笑ひ、かくも愛憎の情に輝く彼女の眼は、恰も全然讀書をしたり藝術品を鑑賞したりすることを解せぬかに見える。」トルストイの描くところは、すべての外的な社會的な歴史的な掩ひを引きはがしたところの、内的な動物的な原始的な人間、即ち謂ふ所の魂的人間である。

魂的人間の大きな描寫者、肉の洞觀の並び無き藝術家——このメレジュ・コフスキイの結論は、藝術家としてのトルストイの特質を最もよく把握したものであると同時に、人としてのトルストイの本質を這

破して最も正鵠を射得たるものと思ふ。なほ、トルストイの藝術乃至藝術家としてのトルストイに對して論じた人は澤山あり、傾聴に値する議論も頗る多いが、こゝに一々それを紹介する餘裕のないことを遺憾とする

——トルストイ十二講了——

■トルストイ年譜■

- 一八二八年——八月二十八日、ヤスナヤ・ポリヤナに生る。
- 一八二九年(一歳)——母、マリヤ死す。トルストイ此時滿一歳六箇月に過ぎず。
- 一八三六年(八歳)——父、ニコライ、トルストイ死す。五人の兄弟と共に叔母オステン・サーケン夫人に養はる。
- 一八三七年(九歳)——祖母死す。
- 一八四一年(十三歳)——叔母オステン・サーケン夫人死す。他の叔母ユーシコフ夫人に養はる可くカザンに移る。
- 一八四三年(十五歳)——カザン大學に入る。彼の兄三人もこゝに學べり。彼は東洋語學部を選びたるが、試験を通過する能はざりし爲法律に轉ぜり。此頃ルツソオの書を読み大にその感化を受く。
- 一八四四年(十六歳)——齋する事を止む。懷疑に囚はれたる結果也。所謂「青春の曠野」この頃よりその前に開

- 一八四七年(十九歳)——學業を一抛して兄ニコライと共にヤスナヤ・ポリヤナに歸る。寛仁なる地主として農奴の爲に憐みを致さんと企てしが、實際に臨んで全く其の理想破る。「地主の朝」は此間の消息を描く。
- 一八五一年(二十三歳)——これより先、聖彼得堡に赴き、放蕩自恣の日を送る。「余は獸の如く生活しつゝあり、唯全然墮落せざるのみ。余は殆ど一切の研究を抛棄せり。精神的に余は甚だ低し。」とは其頃の日記に記せるところ也。此年四月兄ニコライの高架索の砲兵隊にあるを追ひて其地に至る。高架索行は彼が青春の危機を救へり。此地に止まる事三年、宗教的謙遜の時期こゝに始まり、藝術的創作の最初の企圖も亦燦爛たる火花の如く輝き出づ。
- 一八五二年(二十四歳)——「幼年」「地主の朝」「コザック」「襲撃」等を書く。「幼年」は繼いで出でたる「少年」「青年」と共に、その生立ちの記にして、此年九月より、

ネクラソフ主宰の雑誌「ソヴレメンニク」(現代)にLNTの匿名を以て發表せらる。

一八五三年(二十五歳)——クリミア戦争起る。砲兵士官として従軍す。

一八五四年(二十六歳)——セバストポリーリ防禦軍に加はる。陣中にて「少年」を書く。

一八五五年(二十七歳)——砲彈雨の下、死屍累々の中、トルストイは依然として人間の運命、生活の目的、乃至永遠の眞理を想ひ續く。此年五月五日の日記に「宗教を以て人類を結合する爲に意識的に働く——是れ余が鼓吹せんと欲する觀念の根柢也」と記せり。

此年「伐木」の作あり。又「セバストポリーリ」の作あり。「セバストポリーリ」は翌年に至りて完成す。

此年八月、セバストポリーリ開城。兵役を捨つ。ツルゲエネフ、ネクラソフ等、雑誌「ソヴレメンニク」を中心とせる彼得堡の文學者團に迎へられ、若き天才の作家として、同時に、セバストポリーリの英雄として歓迎せらる。

一八五六年(二十八歳)——ヤスナヤ・ポリヤナに歸る。少女ヴァレリヤ・アルセネーワとの戀愛事件あり。

「戰場にて莫斯科の知人と逢ふ」「吹雪」「二人の隠跡

度を研究す。倫敦にてヘルツェンと識る。

一八六一年(三十三歳)——農奴解放令下る。トルストイは、その故郷の州の農民貴族間の仲裁者に任ぜられ、ヤスナヤ・ポリヤナに歸る。農民の味方となり、貴族社會の憤を買ふ。

ツルゲエネフと激しく争ひ絶交す。ヤスナヤ・ポリヤナに學校を開き、露西亞初等教育刷新の爲めに模範を示さんと企て、「ヤスナヤ・ポリヤナ」と云へる教育雑誌を出し、「ヤスナヤ・ポリヤナより」といへる總括的標題の下に概範國民讀本を發行す。又、「國民教授を論ず」以下數篇の論文をこの年よりして公にす。

一八六二年(三十四歳)——肺部の疾患を感じ草原地方に遊びてクミス(馬乳)療法を試む。留守中ヤスナヤ・ポリヤナは、官憲の捜査するところとなる。ヤスナヤ・ポリヤナは、既に政府の敵視するところとなれるなり。

此年九月、莫斯科の宮廷醫ペールスの二女ソフィヤと婚す。ソフィヤ此時十八歳。

一八六四年(三十六歳)——「戦争と平和」を公にす。「戦争と平和」は最初「一八一五年」と題したりき。

一八六六年(三十八歳)——士官を殴打せし罪を以て軍法

二

兵「王突數取の備忘録」等の作あり。

一八五七年(二十九歳)——一月歐洲漫遊の途に就く。巴里にて死刑を見、強き印象を受く。瑞西に遊びゼネヴァ湖畔に滞在。八月、獨逸を経てヤスナヤ・ポリヤナに歸る。

「青年」リュセルン「アルバート」等の作あり。此年十二月、友人フェットと共に熊狩に赴き、危くその害に逢はんとす。

一八五九年(三十一歳)——莫斯科文藝會の會員に選舉さる。

「三つの死」「結婚の幸福」等の作あり。

一八六〇年(三十二歳)——兄ニコライ死す。ニコライは彼に最も大なる感化を與へたる人也。その死は彼に、強き、終生拭ふ事能はざる印象を與へ、彼の思想を新しき方面へ導けり。我が道徳的觀念のうちに保留せられたるもの唯眞理を識り、之を語らんとするの一事のみ。余はそれを藝術の形を以てせざる可し。藝術は畢竟一種の虚偽のみ、余は既に美しき虚偽を愛する能はず。」とは當時の彼の所懐也。此年、「ポリクシユカ」の作あり。

外國を漫遊して、獨、佛、英等に於ける初等教育の制

會議に於て死刑を宣告せられたる一兵卒の爲に抗議し辯護す。

一八六九年(四十一歳)——「戦争と平和」を完結す。「戦争と平和」執筆中馬より落ちて右手を挫き、その義妹に口授しつゝ著述を續けたる事あり。

此年、シヨウベンハウエルを讀んで感激す。此頃より彼が心漸く動搖しはじむ。

一八七二年(四十四歳)——材を彼得大帝時代に取リし大小説の腹案を起せしが、翌年に至り之を放棄す。

一八七三年(四十五歳)——入門讀本を書く。希臘語に熱中す。英國へ移住せん事を思ひ立つ。「アンナ・カレニナ」の稿を起す。同年、サマラ州の飢民救助に盡力し、救恤金二百萬ルーブリを得て之を施す。

一八七五年(四十七歳)——伯母タチヤナ死す。タチヤナはトルストイの生涯に大なる感化を與へたる婦人にして、トルストイの爲に第二の母とも云ふ可き人なり。

一八七六年(四十八歳)——「アンナ・カレニナ」を完成す。「アンナ・カレニナ」に着手せる一八七三年より七五年の間に彼は三人の愛兒を失へり。而して七六年には夫人の病めるあり。彼は「幸福はわが家を去れり」

三

との嘆聲を漏らせり。而して彼の心内の問題、漸く彼を苦めはじめたる也。今の生涯の危機にあり。

一八七八年(五十歳)——「十二月黨」の作あり、断片也。此年ツルゲエネフと和解す。

一八八一年(五十三歳)——民話「人は何によつて生くる乎」の作あり。論文「獨斷的神學の批評」の著あり。正教の教條に對して猛烈なる攻撃を加へたるもの也。「四福音書の統一と翻譯」の著に著す。此書は翌年に至りて完成せり。彼独自の立場より基督教の眞髓を指示せるの書也。

革命實行委員皇帝アレキサンドル二世を弑す。此事は彼に深刻なる印象を與へたり。彼はアレクサンデル三世に上書して基督教の爲に叛逆者を免せん事を望みしが答へられず。

一八八二年(五十四歳)——「我が懺悔」を公にす。これ所謂、轉機を標せるの書にして、昨の非を語り、新しき宗教的生活の發程に序したるの書也。

此年の冬、莫斯科に民勢調査の企あり、彼は窮民の慘狀を眼のあたりに見たり。彼はその日撃せる事實を一友に語りつゝ、叫び、泣き、且つ拳を揮ひ、人はかくの如くして生く可からずと嘔り泣きつゝ云へり。

これより數箇月、彼は恐る可き絶望の狀態にしづめり。

一八八三年(五十五歳)——「我が宗教」を出す福音書の上に自己の信仰を建立せる也。此年ツルゲエネフ死す。死に當り、トルストイに文藝に歸らん事を勧告す。

一八八四年(五十六歳)——「我等何を爲す可き乎」を公にす。ロマン・ロオランに従へば、これが第二の危機の表現也。民勢調査の際に見たる窮民の慘狀——それによりて刺戟せられたる人道的苦悶の痛みを叙し財産を私有するの罪惡なるを説き、深く自ら責むるの念に堪へず。

此年より年來の嗜好たる狩獵を廢す。

一八八五年(五十七歳)——「老人」愛ある所に神あり。「火を等閑にせば」等の通俗物語を書く。曩に書ける「人は何によつて生くる乎」の類也。

一八八六年(五十八歳)——「イヴンの馬鹿」「人はどれだけの土地を要する乎」「三老人」「疾い脚」「馬の話」「蠟燭」「教子」「イリアス」等を書く。いづれも通俗物語にして、ロマン・ロオランの「藝術以上の藝術」と推稱せるもの也。而してこれ等の著は全世界

に於て讀まれ、發、部數一年約四百萬冊に及べり。著者として世間に盡す傍ら、トルストイは此年頃全く農民としての生活を營み、伐木、耕耘に従事し、補靴工として働き、我手に造れる靴を穿てり。

此年、枯草を運ぶ荷車に攀ぢのぼらんとして膝を傷け、一箇月間病床にありき。通俗劇「闇の力」を出す。上場を禁止さる。此年アルクセイ・ツアブプロフスキイ兵士たる事を肯んぜず、懲治隊に投ぜらる。トルストイの説を實行せる也。

「イヴン・イリイッチの死」を書く。

一八八七年(五十九歳)——通俗劇「最初の醸造者」を書く。此年「人生論」を公にす、最も組織的に彼の人生觀を述べたるもの也。

此年十月、銀婚式を舉ぐ。家庭及び周圍、殊に以前の朋友たる貴族との苦々しき關係漸く緩和せらる。

一八八八年(六十歳)——通俗物語「光ある中光の中を歩め」を書く。

一八八九年(六十一歳)——論文「手の労働と智的労働」を公にす。

一八九〇年(六十二歳)——小説「クロイツェル・ソナタ」を公にす。

一八八八年(六十三歳)——露西亞全土に大饑饉あり。大規模の救恤をなす。

一八八九年(六十四歳)——引き続き飢民の救恤に盡力す。救はるゝ者一萬三千八。

「飢饉に就いて」の一論文を公にす。

一八八九年(六十五歳)——飢民の救恤を續く。「神の國は汝の衷にあり」といへる書を公にして、基督教の眞意を説き、且つ「國家」及び其の組織を説きて猛烈に之を非難す。當局はこの書の頒布を禁止、彼を目するに無政府主義者を以てす。

「兩性論」汝の本心に歸れ」等公にす。

一八八九年(六十七歳)——「愛國と基督教」を公にし、露佛同盟を悲喜劇と評す。小説「主人と下男」とを公にす。

此年七月、「ツホポール」の徒、運動を起す。陰にトルストイを盟主とす。トルストイ政府の嫉視を受くる事益々甚だし。

一八八九年(六十八歳)——小説「ハヂ・ムラアト」を起稿す。

一八八九年(六十九歳)——家出の遺書は既にこの年に書かる。

一八九八年(七十歳)——「藝術論」を出す。
 一八九九年(七十一歳)——小説「復活」を公にす。加奈陀に移住するゾホボルの徒の爲に旅費を得可く執筆せるもの也。
 一九〇〇年(七十二歳)——「現代の奴隸制」を公にす。
 一九〇一年(七十三歳)——希臘正教會、トルストイを破門す。此事、露國の上下に非常なる感動を興へ、彼は宛ら誕生日の如く祝せられたり。
 「破門の命令に對する司教會への答」「愛國と政府」「唯一の手段」「皇帝及びその輔弼者」等の諸論文を公にす。最後のものは、露西亜人民の悲惨なる境遇を述べて改革の順序を暗示せるもの也。
 此年危険なる疾患あり、南方クリミヤに冬を避く。
 一九〇二年(七十四歳)——「宗教とは何ぞ」「勞働者へ」等を公にす。
 一九〇三年(七十五歳)——「沙翁論」を公にす。「舞踏會の後」「贗造手形」等の作あり。
 一九〇四年(七十六歳)——時、日露戦争に際す。「汝自らを思へ」の一文を發表して戦の非を痛論す。
 「賢哲の思想」を公にす。基督、ソクラテス、ルソー、パスカル、佛陀、孔子等の語を集めたるもの也。

一九〇五年(七十七歳)——「大なる罪」「政治家に與ふ」等を公にす。
 一九〇六年(七十八歳)——「讀書の一週」を公にす。一年三百六十五日に配したる賢哲の語録也。
 一九〇八年(八十歳)——「余は沈黙する能はず」を公にす。死刑に對する悲憤を叙べたるもの也。
 此年、トルストイ八十歳、露西亜國民は皆其の愛する「偉大なる老翁」の誕辰を祝し、政府の干渉甚だしかりしに拘らず、國民的一大祭日として全土の賑ひを成す。
 一九〇九年(八十一歳)——トルストイ博覽會彼得堡に開かる。「平和會議に與ふ」を公にす。
 一九一〇年(八十二歳)——十一月十日家出十一月二十日アスタポオ驛に死す。

大正六年十二月五日印刷
 大正六年十二月十日發行
 大正七年二月廿五日再版

(定價金壹圓五拾錢)

著者 昇 曙 夢

發行者 佐藤 義 亮

東京市牛込區矢來町中の丸

トルストイ二十講

發行所

新潮社

電話番町(長)八〇九番
 短番東京壹七四貳番

印刷所 東京市神田區宮本町五番地
 電話下谷四〇六七番
 (印刷者) 新潮社印刷部
 高橋治

トスルトイ叢書

(一第) 我が宗教 生田長江 譯

杜翁著書中最重要なるもの一也。彼が独自の立場より近世の誤れる基督教を是正し、眞の信仰とは何ぞやを説くに、其平生の心血を凝したる、にがく苦しき體驗を以てせるもの。

(二第) イワン・イリイツチの死 (附) 主人と下男 福士幸二郎 譯

平凡なる一官吏の生涯を通じて、「死」の問題を取扱へる小説也。魂のうめきをさながらに聞くが如き沈痛なる作品にして、杜翁の數多き短篇中、最も傑出せるものと稱せらる。

(三第) 幼年少年 江馬修 譯

是れトルストイ自ら其の生ひ立ちを記せる傑作。偉大なる靈魂の芽生と成長とは、嚴密靈活なる自己解剖の筆によりて遺憾なく描き盡くさる。眞に是れ萬人必ず讀む可きの書也。

(四第) ハヂムラート 相馬御風 譯

杜翁遺稿の一。藝術的價値に於て自餘の遺著を遙に凌駕する傑作也。材を露國が高加索を征服したる當時にとり、同々教の一勇士を主人公として描ける東洋的色彩の豊かなる小説

(五第) 闇の力 (附) 生ける屍 中村吉藏 譯

是れ翁の代表的戯曲也。無知無漸、野獸の如き下層農民の生活に材をとり、衰通墮胎毒殺等あらゆる罪惡のどん底より、次第に良心に目ざめゆく靈魂の曙を描ける最も高名なる作

(六第) コサツク 廣津和郎 譯

若き砲兵士官たるトルストイが戎衣に秘めたる彩管を揮つて、風光のすぐれたると女の美しくしきを以て名高き高加索の自然と人事を活寫せるもの。翁全作中最も重要なるもの也。

■ 總洋布最上製 ■ 一冊十七錢 ■ 送料八錢 ■

トスルトイ叢書

(七第) 青年 江間修 譯

「幼年少年」に次ぐトルストイの生ひたちの記也。彼の鋭才敏感の少年イルテネフは更に一生の危機たる青年期をいかに送られるか。研醜共に隠くす所なき大膽深刻の描寫を見よ。

(八第) クロイツエル・ソナタ (附) 吹雪 廣津和郎 著

烈しき嫉妬の故に妻を殺せる者が燈影暗き夜汽車の一室に語る其犯罪の顛末を聞け。これ杜翁が數多き著作中、その性慾觀男女觀を赤裸々に吐露せるものとして最も高名の作也。

(九第) 結婚の幸福 谷崎精二 譯

三十一歳のトルストイが過去の戀愛の追憶と未來の結婚の活の空想とを織り交ぜて描けるものにして最も情味に富める作也。附録には初期の傑作「三つの死」及び「アルペアト」あり

八篇以下定價七十五錢

トルストイ小話文庫

(各篇) 小形特製美本 一冊二十五錢 送料一冊四錢

- (1) 蠟燭と一老人 (外三篇) 昇曙夢譯
- (2) イワンの馬鹿 (外二篇) 福士幸二郎譯
- (3) 人だけの土地 (外三篇) 久保正夫譯
- (4) 火を等閑にせば (外二篇) 衛藤利夫譯
- (5) 人よつて生くる乎 (外三篇) 昇曙夢譯

各篇みな詩趣深く情味ゆたかに涙ぐましき迄に尊く懐かしき物語である。西洋では毎卷數十萬部を賣盡くしたさうだ。眞にあらゆる階級の人々に必ず讀んで貰ひたきは、此の叢書である。

トルストイ著 昇 曙夢氏 米川正夫氏共譯

(細二千四百頁)

露文全 直接譯 戰爭と平和

總洋布上製 稀有の美本 全三冊 價四圓五十錢 送料二十四錢

▼分本▼全六冊 一冊定價一圓 送料一冊八錢 六十五錢 三冊迄十二錢

本書はナポレオン侵略時代の露西亞の社會相を經とし、トルストイ自身の閱せる深刻にして痛切なる苦悶を緯とし、構想の雄大、描寫の靈活、共に無雙。人物の主要なるもの二十餘人、中に、作者の化身とも見る可き主人公ピエールとナポレオンとに於て精神界の偉人と物質界の偉人との逢遭を描けるが如き、實に古今の文學中稀に見るの壯觀たり。本書は、露文學界の權威たる昇氏と、新進露文學家として聲譽高き米川氏とが二歳有餘の努力によつて成れるものにして、之を普通原稿紙にして四千枚の大作、その一字を略せざる全譯也。而して直ちに原露文より移植せるものにして、原作の面目潑刺たるは、英獨等の重譯書の企及す可からざるものたるや言を待たざる也。

トルストイ著 相馬御風氏譯

我が懺悔

四版五出 賣切版來

▼總洋布最上製 ▼社翁肖像二葉 ▼定價金七十錢 ▼郵送料八錢

トルストイ齡五十、藝術の榮光に輝ける其前生涯を否定して、宗教的精神の途に上らんとし、敬虔の涙を以て昨の非を懺悔す。是れ實に全人類の悩みを代表せる偉大なる心靈の苦悶史にして、トルストイの著作頗る多しと雖も、最も赤裸々に其の眞面目を露呈せるもの、此の書に若くは無し。彼が他の著作に現はれたる凡百の思想と感情とは、悉く此の一卷に凝結す。相馬御風氏、感激の餘を以て新譯を全うせるもの即ち本書にして、附するに「廻轉期のトルストイ」なる一大論文を以てせり。

■著 イ ト ス ル ト ■

人生論 相馬御風譯

杜翁の根本思想は、此書に於いて遺憾なく窺ふことを得べし。世の哲學書の乾燥無味なると遂に其の選を異にし、縱横の比喻を交へながら、極めて平明、趣味饒かなる筆を以て説き去り説き來る。まさに是れ人生最高最貴の書。

性慾論 相馬御風譯

性慾は最も嚴肅にして又最も痛切なる事實也。曠世の大偉人は、此の問題につきて奈何に感受し、はた奈何に解釋せるか。「人生論」と共に何人も教へらるゝところ多かる可きは實に此の一篇たること、また言を須むざる也。

光あるうち 光の中に歩め 阿部次郎譯

聖書の中の一句を以て題せる此小説は初代基督教に關する見解を最も平明に簡潔に、而して感情を以て美しく描き成せるものにして、又、彼が戀愛觀結婚觀を端的に知るを得べく、夙に杜翁作中の異彩と稱せらるゝもの也。

パウル・ピルコフ著 相馬御風氏譯

トルストイ傳

杜翁一代の畫傳 とも云ふ可き寫 眞十四葉掲載す ▼送料 八錢

數多きトルストイ傳中、簡明にしてよく眞髓を得たる點に於いて、正確無比なる點に於いて、はた一般的通俗的な點に於いて本書にまさるものあるなし。本書はトルストイの心友にして日々彼に親炙し、彼とその精進の程を同じうせるピルコフが書けるもの。トルストイの人物及び生涯の外面的輪郭を描破すると共に、その内面的眞髓を剔出して餘すところなし。トルストイに入らんとする人の第一に讀む可きは、即ち此の書也。

製上・定價三十五錢・送料六錢

有島武郎氏著
死 (有島武郎) (五版)
定價五拾五錢
送料八錢

江馬修氏著
新作 長篇 暗礁 (三版)
定價一圓四十錢
送料十二錢

江馬修氏著
新作 長篇 受難者 (七版)
定價一圓四十錢
送料十二錢

武者小實篤氏著
小さき世界
定價一圓三十錢
送料十二錢

夏目漱石氏著
漱石 選集 色鳥 (七版)
定價一圓三十錢
送料十二錢

島崎藤村氏著
縮刷 破戒 (四版)
定價六十八錢
送料八錢

島崎藤村氏著
縮刷 家 (五版)
全一冊
定價八十五錢
送料八錢

田山花袋氏著
生・妻・縁 (三版)
三部作 一冊各五十五錢
送料各八錢づゝ

田村俊子氏著
彼女の生活 (再版)
定價九十五錢
送料八錢

高濱虚子氏著
道 (創作集)
定價八十五錢
送料八錢

徳田秋聲氏著
長篇 奔流
定價九十錢
送料八錢

江馬修氏著
寂しき道 (再版)
定價九十五錢
送料八錢

新與文壇の全容を看よ
新進作家叢書

新人競ひ起つて面目全く改まられる現下文壇の鳥瞰圖を示すべく新進作家中聲望最も高き人々を選び其の自信ある作品を請ひ得て一卷となし以て本叢書を刊行せるが果して大歡迎を受け發行き極めて盛也

- | | |
|------------|--------|
| 第二編 新らしき家 | 武者小實篤著 |
| 第三編 恐ろしき結婚 | 里見 弴著 |
| 第四編 生あらば | 豊島與志雄著 |
| 第五編 大津順吉 | 志賀直哉著 |
| 第六編 生と死の愛 | 谷崎精二著 |
| 第七編 結婚の前 | 長與善郎著 |
| 第八編 暴君へ | 有島生馬著 |
| 第九編 煙草と悪魔 | 芥川龍之介著 |
| 第十編 夢と六月 | 泰三 |
| 第十一編 澄子の兄 | 江馬修 |
| 第十二編 手品師 | 久米正雄 |
| 第十三編 題未定 | 中條百合子 |

各編定價一圓四十錢 送料四錢

カラマーゾフの兄弟

「戦争と平和」と並んで世界的二大雄篇、之を邦文に譯して實に三千枚に亘る大作也。今、青年露文學として噴々の聲譽ある米川氏によりて、直接露の原文より全譯せらる。近時翻譯壇の一大異彩也。

全三冊 上中(再版) 總洋布最上製 下卷(新刊) 一冊價一圓三十錢 送料一冊八錢づゝ

ドストエーフスキイ著 米川正夫氏譯

代名作的選集

紅葉辭作以後の新文學勃興時代より最近の文壇に及び、諸名家の代
表的又は出世作を選びて本集を刊す。實に是れ我儕近世文藝の精華に
して不朽の名作のみ也。新興文藝を永久に傳ふる金字塔也。

■羽二重表紙種美本
■定價一冊三十五錢
■送料一冊金四錢

第一 ■ 牛肉と馬鈴薯	國木田獨歩	十五 ■ 戀	ざめ	小栗風葉
第二 ■ 坊っちゃん	夏目漱石	十六 ■ 別れた妻	近松秋江	
第三 ■ 蒲團	田山花袋	十七 ■ はつ姿	小杉天外	
第四 ■ 透谷選集	北村透谷	十八 ■ お艶殺し	谷崎潤一郎	
第五 ■ 春	(全二冊) 島崎藤村	十九 ■ 俳諧師	高濱虛子	
第六 ■ 春	(全二冊) 島崎藤村	二十 ■ 煤煙	(全二冊) 森田草平	
第七 ■ たけがくらのべ記	高山樗牛 樋口一葉	廿一 ■ 花枕	正岡子規	
第八 ■ 爛れ	徳田秋聲	廿二 ■ そこの妹	武者小實篤	
第九 ■ 平野	二葉亭四迷	廿三 ■ 旅役者	長田幹彦	
第十 ■ 何處へ	正宗白鳥	廿四 ■ 物言はぬ顔	小川未明	
第十一 ■ 今戸心中	廣津柳浪	廿五 ■ ふとろ日記	川上眉山	
第十二 ■ 耽溺	岩野泡鳴	廿六 ■ 體の皮	上司小劍	
第十三 ■ 明治詩歌選	詩壇六名家	廿七 ■ 女作者	田村俊子	

377
42

終

